２０１１年度　事業の概要

1 調査と研究 …… 28
飛鳥・藤原京の発掘調査 …… 28
平城京の発掘調査 …… 28
企画調整部の研究活動 …… 29
文化遺産部の研究活動 …… 30
●歴史研究室の調査と研究 …… 30
●建造物研究室の調査と研究 …… 31
●景観研究室の調査と研究 …… 31
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 32
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 32
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 32
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 33
●年代学研究室の調査と研究 …… 33
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 34
国際学術交流 …… 34
●中国社会科学院考古研究所との共同調査 …… 34
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 35
●中国河南省文物考古研究所との共同研究 …… 35
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 35
●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業 …… 35
●中央アジアにおける研究協力 …… 36
●中国霊井遺跡出土品に関する河南省文物考古研究所への研究協力 …… 36
●カンボジア APSARA とのアンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究 …… 36
●コロンビア大学との研究交流 …… 36
海外からの主要訪問者一覧 …… 37
海外からの招聘者一覧 …… 38
研究者の海外渡航一覧 …… 38
公開講演会 …… 42
東京講演会 …… 42
第108回公開講演会 …… 42
第109回公開講演会 …… 42
研究集会 …… 43
科学研究費等 …… 43
学会・研究会等の活動 …… 47
国が実施する事業等についての調査・協力 …… 48
●平城宮跡の整備 …… 48
●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査 …… 49
●キトラ古墳に関する調査研究 …… 49
発掘調査現地説明会・見学会 …… 49

2 研修・指導と教育 …… 50
文化財担当者研修と指導 …… 50
京都大学（大学院）との連携教育 …… 50
奈良女子大学（大学院）との連携教育 …… 50

3 展示と公開 …… 52
飛鳥資料館の展示 …… 52
平城宮跡資料館の展示 …… 52
解説ボランティア事業 …… 53
奈文研概要掲載文書 …… 53

4 その他 …… 54
刊行物 …… 54
人事異動 …… 58
予算等 …… 59
職員一覧 …… 60

1 調査と研究

飛鳥・藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2011年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で11件、藤原京跡と飛鳥地域で６件である。加えて、2010年度末において調査途中であった、水落遺跡の調査１件も実施している。以下、主な調査成果について概要を記す。

藤原宮跡では、第169次調査として朝堂院朝庭の調査を実施した。大極殿院の南に調査区を設定し、朝庭中央部の状況と造営過程の解明を主な目的とした。藤原宮期の遺構としては、これまでの調査と同様に広場SH10800の礫敷、排水のための溝等を検出した。藤原宮造営前の遺構としては、先行朱雀大路東側溝SD10750と、これに沿って南北方向に並ぶ柱穴列を確認した。藤原宮造営期の遺構としては、これまでの調査で確認していた造営に関わる運河SD1901を検出し、その総延長は570m以上に達する。また、これまでの調査で確認していた運河の支流と同様に、運河に接続するとみられる斜行溝も検出し、一定間隔で支流が設けられていることがうかがえるようになった。さらに、運河の東側では斜行溝を埋め立てた後に、掘立柱建物が建てられたことが判明した。掘立柱建物は５棟を確認し、礫敷下での検出であることから造営期であることが考えられ、少なくとも３時期の建て替えが明らかとなった。これらから、藤原宮造営期において従来考えられていたよりも複雑な遺構変遷をたどる状況があきらかとなった。

飛鳥地域では、第165次調査として水落遺跡を調査した。第165次調査東区に引き続いておこなわれた西区の調査である。調査地は漏刻台と考えられている基壇建物SB200の北側にあたり、基壇建物を取り囲む掘立柱建物SB280が想定された。調査では、掘立柱建物SB280の柱穴列を想定通りに検出し、さらに、基壇建物を取り囲む掘立柱建物の隅部にあたるSB4400を検出した。SB4400は掘立柱建物で、柱穴底部には礎盤石を据えていることが確認された。SB4400から基壇建物SB200を中心に対角の位置には、水落遺跡７次調査でSB3440が検出されており、今回のSB4400は同様の構造の建物であったことが判明した。また、調査区北側に位置する石神遺跡の南限を示す石敷についても調査をおこない、石敷の南端の様相を確認した。

甘樫丘東麓遺跡では、第171次調査として第161次調査区の谷側を調査した。調査の主目的は、第161次調査で検出していた谷SX200とこれにともなう硬化面SX202および石敷SX203が、第75-2次調査で検出していた焼土層SX037とどのように関連するかについてあきらかにすることである。谷SX200の調査では、上下２段に平坦面を造り出していることが判明し、上段では硬化面SX202と石敷SX203の全容を明らかにするとともに、更に、硬化面や被熱面の広がりを確認した。下段では掘立柱建物１棟と炭だまりを確認し、上下段合わせて火を使用した様相があきらかになった。

国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備に関わる檜隈寺周辺の調査では、史跡である伽藍中心部の南方で調査をおこなった。調査区は丘陵上と丘陵裾の２カ所に設定した。丘陵上では遺構の存在が推定されていた土壇状の高まりを調査し、平安時代中期から後期にかけての年代と推定される、大型の柱穴２基SX950を確認した。柱穴の方位の振れや規模から、寺院関連遺構であると推定される。丘陵裾では、2010年度の試掘調査で確認していた石敷SX935の全容と、丘陵上からの土層確認を目的として調査した。石敷SX935は、丘陵側の状況が確認できたが、遺構の主体部は東側水田にあって削平されていることが確認できた。

2011年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会等は以下の通りである。

飛鳥藤原第169次調査（藤原宮朝堂院朝庭）
　現地説明会　2011年11月５日　廣瀬　覚
飛鳥藤原第171次調査（甘樫丘東麓遺跡）
　現地見学会　2012年３月４日　清野孝之

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区で2011年度におこなった発掘調査は、平城宮跡で１件、平城京跡で９件である。また、立会調査は57件である。以下では、主要な調査の成果を記す。

平城宮内では、東院地区を調査した（第481次）。2006年度より断続的に実施している東院地区西部の調査の一環として、第446次調査区の北、第469次調査区の東に、816㎡の調査区を設定した。調査は2011年４月４日に開始し、６月24日に終了した。

検出した遺構は少なくとも６時期に区分できるもので、隣接する既調査区の知見とも一致するものであった。区画施設に着目すると、１期から２期は東西溝、東西塀により、南北を区画していたのが、３期には一転して、南北塀により東西を区画する。４期には再び南北塀が廃され、前後の時期と異なる計画をしたが、５期は塀を廃したまま区画構成を大きく変えた。６期になって、南北80 尺に区画される空間を南北に２つ

並べた。区画施設を含む配置計画の変更を繰り返しながら、奈良時代の末期には極めて整然とした区画を設けたといえる。遺物の出土状況からは２～６期は平城還都後に比定され、奈良時代後半における頻繁な改変を指摘できる。建物の規模・形式および出土遺物からは、本調査区の北部には、東院地区の中枢を支える厨や貯蔵施設等が展開し、南部までの一帯とでは、担った役割が異なると推測される。なお、特筆すべき遺物としては、青銅製の火舎獣脚が２点、須恵器製の火舎の獣脚が１点出土し、貴重な資料となった。

興福寺北円堂院の調査（第483次）は、興福寺の復原整備事業にともなう事前調査として北円堂の外周をめぐる回廊と南門を対象に実施した。調査区は南面回廊・東面回廊のほぼ全域と、北面回廊中央部に設定した。調査面積は676㎡で、2011年７月１日に調査を開始し、10月11日に終了した。

調査では、回廊の遺構を検出し、その規模は南北147尺、東西150尺に復原できる。これは『興福寺流記』の記述と一致する。南門の柱痕跡を確認できなかったが、『興福寺流記』では南門左右の回廊の長さを62尺としており、これに従うと南門の桁行全長は26尺となる。また、南門の基壇規模は東西37尺、南北27尺であることが確認され、南門は桁行３間、梁行２間の規模と考えられる。東面回廊では柱痕跡を検出したが門に関わる遺構は確認できなかった。柱間寸法は、梁行11尺でやはり『興福寺流記』と一致する。桁行は両端を除く125尺を12間で割り付け、整数値をとらない。南面、北面回廊の桁行柱間も同様で、等間と考えると、整数値をとらない。なお、回廊の改修痕跡も検出し、改修前を奈良時代創建当初、改修後を永承火災後の再建の遺構と考えた。その後の改修痕跡が認められなかったため、治承焼討後に回廊を造営したかどうかは遺構からは確認できなかった。回廊の再々建の有無に関しては、瓦溜に含まれる瓦の整理と、焼土層およびそれにともなう炭化物の分析調査を待ち再度検討する予定である。

平城京左京三条一坊の調査（第486・488次調査）は、国営歴史公園の整備事業の一環として国土交通省により「平城宮跡展示館」の建設が予定されている敷地の事前調査である。初年度（2010年度）は、敷地全体の状況を確認するため、南北103ｍ、東西10ｍの調査区を設定し、調査を実施している（第478次調査）。2011年度は第478次調査区に重複させて、調査区を設定した。第486次調査は当初、東西48m、南北34mの調査区を設定し、第478次で検出した六角形の井戸SE9650の断割調査と取り上げのため、井戸の東側に東西3m、南北12mの拡張区を追加した。調査面積は合わせて1,668㎡。2011年９月27日に調査を開始し、12月27日に終了した。第488次調査は第478次調査区南側に東西48m、南北33m、1,584㎡の調査区を設定し、2011年12月22日から調査を開始し、2012年３月30日に終了した。

第486次調査区では小型の鉄製品を造る鍛冶工房を３棟検出した。鍛冶工房は、掘立柱建物の内部に炉・鞴座・金床石を１単位とする施設群が配置されたものである。出土遺物等から奈良時代前半に比定され、平城宮京造営あるいは改修に伴う建築部材の供給をおこなっていたと想定される。古代の都城の造営やそれを支えた現業部門との関係について、重要な問題を提起したといえよう。第488次調査区では鉄鍛冶工房と同時期とみられる建物群を検出した。建物群は坪内道路が通る以前の遺構と考えられ、全体的な工房の配置や存続時期を考えるうえで重要な知見が得られた。第478次調査区で検出した大規模な六角形の井戸は、構造・規模とも他に例をみないものであり、埋土から出土した宮外官衙の存在を示唆するような遺物とあわせ、一坪の特殊性を示すものである。しかし、井戸にともなう遺構の実体は東側に展開する可能性が高い。

2011年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会および現地見学会は以下のとおりである。

第481次調査（平城宮東院地区）
　現地説明会　2011年６月19日　鈴木智大
第483次調査（興福寺北円堂院）
　現地見学会　2011年９月17日　大林　潤
第486次調査（平城京左京三条一坊）
　現地説明会　2011年11月19日　神野　恵
第488次調査（平城京左京三条一坊）
　現地説明会　2012年３月10日　諫早直人

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の整備充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研究に係るさまざまな事業についての全体的・総合的な企画とその調整、そして、事業成果の内外への情報発

信や活用を担当している。

埋蔵文化財担当者研修は、年度ごとに計画を立案し、高度で専門的な研修を実施している。2011年度も、遺跡の発掘調査や成果の整理作業において必要性が高い分野について、専門的な知識や技術が求められる課題に関する研修を実施した。研修には、建築遺構調査課程や報告書作成課程等のように毎年継続して実施しているものと、数年間隔での実施を考えている地質環境調査課程等がある。近年さまざまな要因により研修の受講希望者が減少しており、地方公共団体からの要望や学術研究の進展にあわせて研修内容の改良をおこなっている。

文化財情報電子化の研究とシステム構築については、「第16回遺跡GIS研究会」を開催するとともに、国内外の学会・研究会において研究成果を公表した。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的におこなっており、遺跡・発掘調査報告書抄録・写真・航空写真等のデータベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。調査研究成果の電子化として航空写真画像・ガラス乾板・大判フィルム・35mmスライドフィルム・遺構実測図・遺構カード等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業として、2011年９～10月に実施された集団研修でアジア太平洋地域の16カ国から16名の研修生を招き、木造建造物に関する研修をおこない、個人研修でインドネシアから３名の研修生を招き、木造建造物の保存と修理についての実習をおこなった。

諸外国との国際共同研究としては、中国の、社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究所、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。

また、2011年５月にはユネスコ日本信託基金により、ベトナム・ハノイにおいてタンロン皇城遺跡の発掘技術研修を１月に続いておこなった。

1993年から継続しているカンボジアとの共同研究事業は、本年から新たな５か年計画を開始し、西トップ遺跡を対象にした調査と修復を実施している。本年３月には現地で起工式をおこない修復事業が正式にスタートした。

展示公開および普及については、飛鳥資料館での関係資料の研究とその成果の展示公開、平城宮跡資料館での宮跡調査の成果の展示公開等の事業を実施した。このうち、飛鳥資料館では、特別展として「星々と日月の考古学」と「飛鳥遺珍－のこされた至宝たち－」を、企画展として「鋳造技術の考古学－東アジアにひろがる鋳物師のわざ－」と「飛鳥の考古学2011」を、それぞれ開催した。平城宮跡資料館では、常設展示に新たに「考古科学コーナー」を増設し、研究所がおこなっている保存科学・環境考古学・年輪年代学・測量と探査について、体験を取り入れた展示ブースを設置した。また、企画展として「地下の正倉院展－コトバと木簡」と「発掘速報展 平城 2011／文化財レスキュー展」を開催した。これらについては別項を参照されたい。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。

各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2011年度は、興福寺・仁和寺・三仏寺・氷室神社大宮家・薬師寺・旧春日座大工の木奥家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

興福寺調査は、『興福寺典籍文書目録』の続編を公表するための調査を続け、第92函紙背文書・第112函～第115函の調書を作成した。写真は第92函～第98函を撮影した。仁和寺調査は、『仁和寺史料 目録編〔稿〕』の続編公表のための調査として、御経蔵聖教第41～第43函の調書原本校正、第38函～第41函の写真撮影を実施した。また、第150函所収の中世文書の資料紹介を意図して、写真に基づいて釈文を作成し、その原本校正をおこなった。薬師寺調査は、第51～第57函の調書作成と、第24函・第25函の写真撮影を実施した。

三徳山三仏寺は、近世文書が納められている第３函・第４函の調書を作成し、第２函～第４函の写真撮影を実施した。また、木製品・仏像や、三仏寺所蔵の

大日寺出土瓦経の調査・写真撮影を実施した。更には、大日寺出土瓦経の理解を深めるために、鳥取県立博物館・倉吉博物館・山陰歴史館等、諸所に分蔵されている大日寺出土瓦経の調査をおこなった。

氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で連携研究をおこない、未成巻文書について、昨年度までに作成した調書の校正作業をおこなった。

また、江戸時代に春日座大工を世襲していた木奥家の古文書調査を実施した。近世の春日社造営関係文書である。これは、建造物研究室がおこなっている大工道具調査に関連したもので、その成果として奈良文化財研究所編『木奥家所蔵大工道具調査報告書』を公刊し、古文書に関しては目録・論稿を掲載した。そのほか、明日香村大字八釣の妙法寺が所蔵する資料や、明治時代に平城宮跡保存運動に活躍した石崎勝蔵に関係する資料の調査をおこなっている。また、昨年度の調査成果に基づき、「明日香村八釣の明神講関係資料調査」を『奈良文化財研究所紀要2011』に報告した。

その他、調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査・文化庁依頼の醍醐寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2011年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

歴史的建造物の調査研究の一環として、奈良町に所在する木奥家の所有する大工道具の調査をおこなった。木奥家は春日大工の末裔で宮大工の道具が数多く伝来する。それらの詳細調査をおこない報告書を刊行した。

古代建築に関する調査研究では、2009年度に始まった法隆寺所蔵の古材調査を継続して進めた。昭和修理に際し再使用不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材について奈良県文化財保存事務所が法隆寺から委託されておこなっている整理および収納の業務にあたり、当研究所が部材の実測、加工痕調査、写真撮影等をおこなった。2011年度まで金堂の旧部材約1500点の調査を終了し2012年度以降も調査を継続する予定である。

受託調査として、兵庫県近代和風建築総合調査、延暦寺建物悉皆調査、岡山県高梁市所在の旧高梁尋常高等小学校建築調査をおこなった。兵庫県近代和風建築総合調査は、兵庫県が本年度からはじめた調査で、奈文研は主としてリストにあげられた個々の物件にかんする実測、写真撮影、所見執筆等の２次調査を現地に赴いておこなっている。延暦寺建物悉皆調査は比叡山延暦寺の管理する全ての建築を対象とした所在調査と、重要な物件についての２次調査である。旧高梁尋常高等小学校建築調査は高梁市街地にのこる明治洋風建築の詳細調査である。いずれも2012年度に継続しておこなう予定である。

海外研究機関との共同研究では、中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所との建築文化遺産にかんする研究をおこなっており、2011年度は北京の中国文化遺産研究院でおこなわれた「仏塔建築保存」をテーマとした国際学術会議に出席し発表をおこなった。

国外調査としては、文化庁の海外協力事業に協力し、ベトナム南部フーホイ村、カイベイ市の集落町並み保存対策調査をおこなった。また、海外における活用を期して前年度刊行した中部フォックティック村の保存対策調査報告書の英語版を刊行した。

調査研究の一環として、奈文研所蔵資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化と目録の刊行、文化財建造物の修理時の復原等を主な内容とする現状変更説明資料の刊行を継続しておこなっている。2011年度に刊行した現状変更説明資料は1953～1955年度分である。

このほか、各地で実施されている文化財建造物保存修理事業、伝統的建造物群保存事業等について援助・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観の体系化や保護施策、そして関連する学術研究に資する目的で、諸外国との比較をおこないつつ、我が国の文化的景観保護行政にかんする基礎的・体系的な情報の収集・発信をおこなうとともに、研究集会等を開催して情報の共有と深化をはかっている。また、文化的景観の現地調査を地方公共団体からの受託研究等により実施し、保護の実践における諸問題の整理・解決に取り組んでいる。

文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、今年度より諸外国との比較研究を開始した。まずは、アメリカ合衆国国立公園局による文化的景観保護につき、現地研究者との情報交換と事例視察をおこ

なった。今後も継続し、アメリカにおける文化的景観の調査、価値評価、保護手法の体系的紹介を目指す。また、文化的景観の世界的潮流を俯瞰する英文図書の翻訳を進めている。

研究集会等では、少人数の研究会「文化的景観学研究会」において、課題の多い都市の文化的景観等につき俯瞰的な議論をおこなった。また、より規模の大きいシンポジウム形式の「文化的景観研究集会（第４回）」を、「文化的景観の現在－保護行政・学術研究の中間総括－」をテーマに開催した。制度発足後６年を経た現状を総括し、文化的景観にかかわる保護行政と学術研究の進展に寄与する基点の形成を心がけた。研究集会の開催にあわせて、昨年度開催した研究集会（第３回）の成果報告書を刊行している。

現地調査・研究としては、地方公共団体からの受託研究として岡崎（京都市）、相川（佐渡市）、長良川流域（岐阜市）の文化的景観調査をそれぞれ実施した。いずれも都市域を含む文化的景観であり、文化的景観保護行政が抱える困難な問題の解決に向け、調査を進めている。うち、岡崎の文化的景観調査については、調査報告書の編集を進めている。また、重要文化的景観「宇治の文化的景観」、「四万十川流域の文化的景観」における整備計画策定のための基礎調査や、明日香村における景観研究の準備を進めている。

今年度の調査研究では、国際比較研究を開始し、より広い視野で文化的景観をとらえることへと踏み出した。文化的景観の保護行政と学術研究、双方の情報拠点として当研究室が機能するべく、引き続き、基礎的・体系的研究を積み重ねていく予定である。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡の整備に関する調査と研究をおこない、その情報を収集・整理・普及するとともに、遺跡の保存と活用に関する基本的な考え方やその実例への適用を検討している。調査研究活動においては、遺跡の保存段階から、整備計画の立案、整備後の遺跡の公開・活用にいたるまでの総合的過程を視野に入れて取り組んでいる。

現在取り組んでいる「遺構露出展示に関する調査研究」では、特に地下に埋蔵されていた遺構を露出展示している事例を中心として全国的な状況を網羅的に把握し、それぞれに生じている課題およびこれまでの対処に係る実績等の検証を進めている。その目的は、既に遺構露出展示をおこなっている数多くの事例が抱える課題の特定とそれらへの対処手法を整理し、また、これから遺構露出展示を検討する場合の指針案を作成すること等により、実りある遺構露出展示のための基礎的・応用的な検討を普及することにある。

今年度は、「遺構露出展示データベース」を構築するため、昨年度実施した関係機関への照会により提供された情報の整理とデータベースのプラットフォームの検討を進めた。これらについては、更に、資料収集・現地調査等によって補足し、管理マニュアル等の検討を含めて、総括することとしている。

また、遺跡整備に関わる今日的な成果と課題を広く検討するため、近年における文化財の総合的把握の動向をふまえつつ、『自然的文化財のマネジメント』をテーマとする研究集会を開催した。この研究集会では、近年の国内外の潮流をふまえつつ、遺跡とその文化を育んできた《地域》を出発点として検討し、遺跡整備の分野がこれから先に取り組むべき方向性にかんする理念と哲学を今日的観点から再考し、遺跡のマネジメントのあり方について検討をおこなった。

一方、当研究室のもうひとつの柱である庭園にかんする調査研究においては、庭園史および歴史的庭園の保存修理等について調査研究に取り組んでおり、国内外における歴史的庭園に関する情報収集等をおこうとともに、基礎的資料の整理を進めている。また、これまでの「古代庭園研究会」を発展させ、中世以降についても検討するため、庭園史学のほか、考古学、文献史学、建築史学、美術史学等の専門家の参加の下、庭園史に関する学際的検討をおこなう「庭園の歴史に関する研究会」を新たに立ち上げ、今年度は『鎌倉時代の庭園－京と東国』を主題として開催した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの４つの研究室は、それぞれの事業計画にそって埋蔵文化財の調査技法にかんする研究開発を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に応じて、専門的な助言や協力をおこなっている。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、１）出土遺物等の材質構造調査、埋蔵環境調査および保存処理の開発研究、２）遺構の安定化法に関する基礎研究、並びに、３）文化財の非破壊材質構造調査法としてのミリ波およびテラヘルツ波の応用研究を実施している。

１）では、①ガラス製遺物のラマンスペクトルの収集、②Ｘ線ＣＴ法による金属製品の構造および腐食状

態の調査、③木造建造物の漆塗装、油系塗装および膠彩色の材質分析による区別、④鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験による腐食のメカニズムの解明に取り組んだ。2）では、調査フィールドから得られた観測データをもとに、熱水分同時移動解析の手法を用いて、土質遺構の露出展示のための換気や空調を利用した遺構の安定化法の検討、および古墳石室内での湛水のメカニズムと、石室内の砂岩の劣化速度に関する検討をおこなった。また、3）では、①ミリ波イメージング装置の出力レベルの改良、②文化財のテラヘルツ分光イメージングのための基礎データの収集と実際の文化財への応用に取り組んだ。また、東日本大震災により被災した文化財のレスキューについて、広く事例と情報を共有し、文化財レスキューのあり方を検討するため、「被災文化財のレスキュー－保存科学の果たすべき役割と課題－」をテーマとした研究集会を開催した。

受託事業として、土壌水分の蒸発による史跡ガランドヤ古墳の石室内環境の変化に関する調査（日田市）、田熊石畑遺跡出土の武器形青銅器保存修理および保存台作成（宗像市）の２件を実施した。連携研究としては、クスノキ製臼保存処理に関する保存科学的研究（大分市）、潤地頭給遺跡出土の準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究（糸島市）、北本市デーノタメ遺跡出土漆塗り土器の保存処理に関する共同研究（北本市）、松平忠雄墓所出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡出土ガラスに関する保存科学的研究（福井県）、お産絵画土器の線描材質の分析（富士見町）の６件を実施した。また、東京国立博物館との機構内業務協力事業により、塑像（供養者頭部）の保存修理と安定台および保存箱の作製をおこなった。

国宝高松塚古墳壁画の保存修復（文化庁委託）において、壁画および漆喰の劣化原因の追究と保存修復に資するデータの集積を目的とした材料分析調査をおこなった。また、石室石材をより安全に静置するための安定化支持具を製作し、取り付けをおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

今年度の発掘指導および研究は、寛永寺（東京）、朝日遺跡（愛知）、京都大学理学研究科所蔵資料（京都）、小竹貝塚（富山）、藤原宮朝堂院（奈良）、東名遺跡群（佐賀）等の分析と報告をおこなった。寛永寺出土徳川将軍親族遺体の調査では、埋葬遺体の腹腔内土壌から食物残渣、花粉、寄生虫卵を検出し、回虫卵や鞭虫卵の存在、薬用のチョウジ、薬用か化粧用のベニバナ、葬儀に多用されるシキミの利用をあきらかにした。藤原宮朝堂院では、造営時に機能した運河跡から出土した資料の中に、関節炎（飛節内腫）の症状が見られるウマの骨が存在することをあきらかにした。藤原宮の造営のため資材運搬を担う駄馬が多く利用されていた実態を示す貴重な資料といえる。また、中国浙江省の田螺山遺跡から出土した、新石器時代初期の動物遺存体から、イノシシ・ブタ、スイギュウの窒素の安定同位対比が通常の野生動物よりも高くなる現象を示すことができた。

研究成果の発信としては、「第15回動物考古学研究集会」を奈文研で開催した。その他、日本文化財科学会、日本人類学会等で発表をおこなった。社会貢献としては、同志社大学、大阪府立弥生文化博物館、富山県埋蔵文化財センター、立命館大学等のシンポジウムや公開講座において講演をおこなった。また、平城宮跡資料館や藤原宮跡資料室の展示に協力して、研究成果の紹介と啓蒙に努めた。

継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、キョン、トド、エゾライチョウ等の現生動物骨格標本を収集した。また、奈文研が所蔵する魚類の骨格標本1,146点の標本目録を『埋文ニュース』146号として刊行し、他の組織、研究者への公開をおこなった。連携研究として、藤原宮から出土した動物遺存体の同位体分析を実施した。

このほか、東日本大震災で被災した陸前高田市立博物館所蔵の骨角器1000点余りを仮保管し、破損状況の観察・記録と脱塩処理の必要性等を検討中である。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では年輪年代法を用いて考古学・美術史学・建築史学・歴史学等、諸分野の研究に資するべく木造文化財の調査・研究をおこなっている。調査対象は遺跡出土品、建造物、美術工芸品等、多岐にわたり、これらの年輪年代測定を実施するとともに、樹種同定調査や調査手法の研究開発にも取り組んでいる。

本年度は引き続き永保寺開山堂（岐阜）の年輪年代調査をおこなったほか、新たに同寺観音堂の年輪年代調査をおよび樹種同定調査を実施した。本調査の結果、材の年代は開山堂が観音堂に先行していることがあきらかとなった。これが建立年代に直結するならば寺伝とは異なる見解を得ることとなり、今後は両堂の建立年代や制作背景等を再検討する必要があるだろう。また、奈良・東大寺法華堂の修理工事にともない

同堂の建築部材と八角二重須弥壇部材の年輪年代調査をおこなった。この調査で得られた年代値はこれまで考えられていた同堂の建立年代よりも古く、法華堂の建立年代の見直しを含めた今後の研究の深化が期待される。複雑な過程をたどったことが知られる東大寺の成立事情の解明についても本調査の成果は活かされることだろう。

美術史関連では木彫神像等のマイクロフォーカスX線CT装置を用いた非破壊年輪年代測定調査を引き続き実施した。奈良・玉龍寺女神坐像はその特異な姿から造像年代の想定が難しかったが、用材の年代値を得た本調査は、本像の造像年代を推定するための基礎データを提供することとなった。

調査手法の研究開発に関しては、非破壊かつ仮想断面の調査ができるマイクロフォーカスX線CT装置による年輪年代調査が今後ますます重要となることを見越し、同装置のX線源と受像部のデバイス交換をおこなった。この改造による出力と解像度の向上を図ることで、これまで不得手であった硬質な対象物や出土木製品のように水を含む試料等にも対応するほか、更に良好な画像の獲得できることとなり、今後の活用が期待される。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年４月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

本年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の寺院と官衙関連遺跡および井戸遺構の資料を収集・整理するとともに、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した寺院・官衙関係資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、主な遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面等の画像データを、奈文研のホームページ上で公開している。また、古代官衙・集落研究集会の資料として「四面廂建物遺構資料集成」を作成した。このほか、文化庁の委託を受けて、『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編―』の作成作業を継続した。

一方、文化財の調査技術の領域では、計測・測量、探査の各分野を中心に活動をおこなった。計測・測量分野では、関係各機関と連携して岩屋山古墳（奈良県）の石室と墳丘の三次元レーザー計測を実施し、その有効性を実証するとともに、ナレッジキャピタル2011で成果を公表した。探査分野では、各地の地方公共団体や大学と連携して、平城宮大極殿院、東大寺法華堂・大仏殿（以上奈良県）、神野向遺跡（茨城県）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（以上群馬県）、周防国庁（山口県）、大宰府（福岡県）等で各種手法の実践と改良をおこなった。

海外では、東京文化財研究所に協力して、中央アジア各国の研究者を対象とした文化財探査ワークショップをカザフスタンで、アクベシム遺跡の測量とワークショップをキルギスでそれぞれ実施した。また、カンボジアのロンヴェーク遺跡では無人飛行艇（UAV）による遺跡のモニタリング、クランコー遺跡では遺跡探査とそれに基づく発掘調査に協力した。

国際学術交流

奈文研では、中国、韓国、カンボジアの３カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、アフガニスタンとイラクを対象とする西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業や2006年６月に発足した文化遺産国際協力コンソーシアムのおこなう支援協力事業にも協力している。

●中国社会科学院考古研究所との共同調査

奈文研と中国社会科学院考古研究所は日中古代都城の比較研究を主題とする研究計画を立て、５カ年にわたる漢魏洛陽城の共同発掘調査研究を進める協定を締結した。

この共同研究では、河南省洛陽市に位置する北魏洛陽城の宮城中枢部分を解明することを目標とした。中国側の事前調査では宮城の正門と太極殿をとおる中軸線上にはいくつかの建物基壇が存在していることをあきらかにしている。2008年度は宮城正門（閶闔門）の北側にある２号門址およびその周辺、2009年度は２号門址の北に位置する３号建物址、2010年度春季は３号建物址の補足調査と宮城西南隅の発掘調査を実施した。

2011年度は春季・秋季にわたり、2010年度の宮城西南隅の補足調査を実施した。城壁については断ち割り調査を実施し、城壁の改築や城壁に沿った水路の状況を確認した。平面の調査では、宮城内外に走る時期の異なる排水施設の状況についても新たな知見を得た。

共同の発掘調査は今年度で終了し、今後は報告書に

むけた遺構の検討、出土遺物の整理作業を実施する予定である。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2011年度から「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」という研究課題を設定し、新たな５カ年計画に着手した。昨年度、中国国家文物局に提出した「日中共同研究申請書」については、その後、補足書類の提出を経て、６月に正式な許可が下り、それを受けて新たに共同研究協定書を締結した。

研究活動は、最初に９月20日から22日の３日間、研究員３名を派遣して瀋陽市の遼寧省文物考古研究所において、今年度以降の詳細な共同研究事業計画について協議し、本年度の調査日程の調整をおこなった。また、遼寧省側から提案のあった遼代仏教文化展に関して、展示品等についての協議もおこなった。

次いで11月５日から９日の５日間、研究員４名を派遣して瀋陽市および朝陽市において調査を実施した。瀋陽の遼寧省文物考古研究所では、金嶺寺遺跡出土瓦（三燕時期）の予備的調査をおこなった。また、朝陽市では、朝陽北塔博物館所蔵遼代仏教文物等の調査等をおこなった。

年度末の３月19日から23日には、研究員３名を派遣し、再び遼寧省文物考古研究所において、金嶺寺遺跡出土瓦の写真撮影・調書作成等の調査を実施した。更に、次年度の詳細な活動計画と調査日程について協議した。

●中国河南省文物考古研究所との共同研究

2011年度は、第Ⅲ期５カ年計画の２年度にあたる。第Ⅲ期５カ年計画は、出土品の整理研究と報告書の刊行と、関連遺物の総合的研究を主とするものである。河南省文物考古研究所が調査した鞏義市黄冶窯跡および白河窯跡の調査研究を中心とするものの、河南省内の他の遺跡等の出土品を対象に加えて、これまでの成果を基により総合的な調査研究を実施することを目的としている。2011年６月に５名の研究者を派遣し、北京芸術博物館と河南省文物考古研究所共催の「鞏義窯陶瓷国際学術研討会」に参加して研究発表をおこなった。11月には６名の研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区出土の唐三彩、北朝白釉、青釉等の陶磁器を調査した。

現在中国で知られている唐三彩を焼成した窯跡のうち、鞏義窯跡以外では、陝西省黄堡窯跡と醴泉坊窯跡の出土品を既に調査している。日本出土の唐三彩に関連した諸問題を広く総合的に検討するため11月の訪中時には河北省を訪れ、邢窯出土資料の調査を実施した。鞏義窯産の唐三彩との異動に関して詳細な観察をおこない、その結果、邢窯出土三彩は鞏義窯の産品よりも胎土の赤みが強く、施釉部分にのみ白色の化粧土を塗布する場合が多いことを知ることができた。こうした発色の唐三彩は日本出土例になく、現時点では日本出土唐三彩の一産地として、邢窯をその候補にはくわえがたいことを改めて確認することができ、有意義な成果が上がった。

また、10月には中国側から５名が来日し、学術講演会を開催するとともに、日本国内の関連資料を調査した。

なお、『鞏義白河窯考古新発見』図録の日本語版は、その作成に向けての編集作業をおこない、2012年３月に刊行した。また、河南省文物考古研究所と連名で「関于古代日本・中国鉛釉陶器釉薬的鉛同位素比値測定」を『華夏考古』2011年第２期に発表し、『河南鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』日本語版の刊行準備をした。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

奈文研と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に「研究交流協約書」を締結し、共同で調査・研究を実施してきた。2011年度はその第３期の初年度にあたり、内容を更新した「研究交流協約書」および「「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」に関する日・韓共同研究合意書」、「発掘調査交流合意書」を４月１日付で締結した。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題に基づき、４回の派遣と３回の受け入れを実施した。研究成果は５カ年計画の最終年度にとりまとめる予定である。

発掘調査交流では奈文研より国立慶州文化財研究所へ研究員１名を派遣し、新羅王京遺跡・四天王寺址・チョクセム遺跡において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約２カ月であった。また、奈文研において国立慶州文化財研究所から研究員１名を受け入れ、藤原宮跡および平城宮跡において共同発掘調査を実施した。受け入れ期間は約1.5カ月であった。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクおよび周辺諸国を対象として文化遺産保存修復協力にかかわる事業を東京文化財研究所と共同で実施しているが、2011年度は、現地調査や現地からの研修生受け入れは実施しなかった。ただ、12月に東京で開催されたユネスコ日本信託基

金によるバーミヤーン遺跡保護専門家会議に参加し、東京と京都で公開シンポジウムを開催し、アフガニスタン等の関係者の奈良見学に協力した。

●中央アジアにおける研究協力

中央アジア諸国ではシルクロードの世界遺産登録を目指す動きがあり、５月にトルクメニスタンでの会議に出席した。世界遺産化を進めるユネスコ事業で東京文化財研究所に協力し、９月19日から24日にウズベキスタンで、文化財資料・情報の標準化に関するワークショップに参加、９月27日から10月19日にカザフスタンで遺跡探査のワークショップをおこなった。また、文化庁の拠点交流事業においても東京文化財研究所に協力して、キルギスのアク・ベシム遺跡を中心に、遺跡のドキュメンテーションに関するトレーニングを10月４日から19日におこなった。また、カザフ国立大学では、昨年度取り交わした研究協力の覚書にもとづき、2012年２月に収蔵資料の調査をおこなった。

●中国霊井遺跡出土品に関する河南省文物考古研究所への研究協力

中国河南省文物考古研究所で進めている霊井遺跡出土品の整理作業は、2011年度には春、冬の２回、研究員ほかを先方に派遣し、順調に進捗させることができた。この結果、必要な実測図作成、法量等の計測は、ほぼ終了し、現在、トレースと解析を進めている。

河南省での整理作業と同時に進めている関連資料の調査も、本年度には、河南省舞陽大崗遺跡の踏査のほか、山東省、河北省、江蘇省、甘粛省、寧夏回族自治区でおこなうことができた。また、夏には中国、韓国より研究者を招聘し、北海道において関連調査等を進め、遠軽町にて講演もおこなった。このほか、整理作業の中間的な成果を11月に国立科学博物館でおこなわれたアジア旧石器協会（APA）日本大会ほかの国際学会で報告した。2012年度には報告書作成を始めるとともに必要な補充調査をおこないたい。

●カンボジアAPSARAとのアンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究

2011年度は第３次中期計画にもとづく新たな西トップ遺跡調査研究計画に関して、現地文化財保護組織であるアプサラとの最終調整をおこない、12月14日に覚書調印式をおこない今次５ヶ年計画を正式に開始した。

今年度の主な事業は、本覚書に基づく西トップ遺跡調査修復事業の準備である。現地に作用小屋を設営するとともに、解体仮組用のコンクリート平場の設営をおこなった。３月に入り、実際の修復活動を開始し、南祠堂の解体仮組を進めた。修復工事の準備と併行して、１月には保存科学班の調査をおこない、解体修復に伴う保存科学的な処置の可能性を検討した。あわせて所内での解体修復の進め方に関する会議を10月と２月におこない、解体修復の進め方、部材修復のあり方、基壇修復のあり方等、種々の検討をおこなった。また、昨年度刊行した西トップ遺跡報告書の英語版を３月に刊行した。

2011年度の招聘事業としては、カンボジア人若手研究者３名を３月20日から28日の間日本に招聘し、研究所の活動や施設の視察、遺跡整備のあり方や各地博物館の視察等をおこなった。

●コロンビア大学との研究交流

2011年３月９日付けで、アメリカ合衆国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所（バーバラ・ルーシュ所長）および建築・計画・保存大学院（マーク・ウィグリー大学院長）と交わした研究協力および交流に関する覚書にもとづき、2011年４月１日から2016年３月31日までの５年間にわたり、①研究者の交流、②文化遺産の調査・研究、保存修復に関する学術活動の共同実施、シンポジウム等の共同開催、③三者が関心を有する文化遺産の調査・研究、保存修復にかんする情報の共有、学術資料の交換をおこなうものである。今年度は、2011年９月27日にコロンビア大学において講演会（JAPAN Architecture + Preservation）を共催し、清水重敦景観研究室長が“Authenticity and Dismantling Repair System in Architectural Restoration in Japan”（日本の建築修復における解体修理とオーセンティシティ）、石村智国際遺跡研究室研究員が“Memories of Sacred Landscape: Lost Female Rituals and Remaining Cultural Landscape in the Amami Islands, Southern Japan”（聖なる景観の記憶：奄美の消えゆく女性祭祀と生き続ける文化的景観）の２つの講演をおこなった。

7.23／文化財ドキュメンテーション国際会議の準備会議出席／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／ '11.7.22～9.7／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／拠点交流
●海野　聡：大韓民国／ '11.7.25～7.30／第一次大極殿院復原にかかる類例の調査／業務委託経費
●北山　夏希：大韓民国／ '11.7.25～7.30／第一次大極殿院復原にかかる類例の調査／業務委託経費
●鈴木　智大：大韓民国／ '11.7.25～7.30／第一次大極殿院復原にかかる類例の調査／業務委託経費
●田代　亜紀子：カンボジア王国／ '11.7.26～8.6／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／文化庁受託
●小澤　毅：カンボジア王国／ '11.7.26～8.7／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／文化庁受託
●金田　明大：カンボジア王国／ '11.7.26～8.7／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／文化庁受託
●庄田　慎矢：大韓民国／ '11.7.28～7.31／財団法人高梨学術奨励基金による調査研究「磨製石器製作工房遺跡の日韓比較研究」に関する資料調査のため／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／ '11.7.28～8.6／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／拠点交流
●松本　将一郎：ベトナム社会主義共和国／ '11.8.9～8.18／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●黒坂　貴裕：ベトナム社会主義共和国／ '11.8.9～8.18／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●高橋　知奈津：ベトナム社会主義共和国／ '11.8.9～8.18／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●林　良彦：ベトナム社会主義共和国／ '11.8.9～8.19／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●庄田　慎矢：大韓民国／ '11.8.15～8.20／科学研究費補助金による調査／科学研究費
●加藤　真二：中華人民共和国／ '11.8.21～8.28／科学研究費補助金による泥河湾旧石器の調査／科学研究費
●松井　章：台湾／ '11.8.22～8.27／台湾において講演会に参加／先方負担
●庄田　慎矢：大韓民国／ '11.8.24～10.21／「日韓古代都城制の比較研究」の共同研究／運営費交付金
●馬場　基：中華人民共和国／ '11.8.28～8.30／シンポジウム報告のため／科学研究費
●渡辺　晃宏：中華人民共和国／ '11.8.28～9.1／シンポジウム報告のため／科学研究費
●石村　智：トンガ／ '11.8.30～9.4／国営公園沖縄海洋博記念公園海洋文化館の新規展示資料の収集／国営公園沖縄海洋博記念公園
●石村　智：サモア／ '11.9.5～9.11／ユネスコ第３回太平洋世界遺産ワークショップに参加／運営費交付金
●森本　晋：チェコ／ '11.9.11～9.17／CIPA（文化遺産記録国際委員会）2011出席／運営費交付金
●森本　晋：ウズベキスタン／ '11.9.19～9.24／文化財ドキュメンテーション国際会議出席・発表／ユネスコ　運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／ '11.9.20～9.22／遼寧省との研究・展示に関する調整と協議／運営費交付金
●小池　伸彦：中華人民共和国／ '11.9.20～9.22／遼寧省との共同研究に関する協議／運営費交付金
●清野　孝之：中華人民共和国／ '11.9.20～9.22／遼寧省との共同研究に関する協議／運営費交付金
●青木　達司：アメリカ合衆国／ '11.9.24～10.1／アメリカ合衆国コロンビア大学との共同研究・研究交流／運営費交付金
●清水　重敦：アメリカ合衆国／ '11.9.25～10.1／アメリカ合衆国コロンビア大学との共同研究・研究交流／運営費交付金
●石村　智：アメリカ合衆国／ '11.9.26～10.2／コロンビア大学日本中世研究所との共同研究、およびペンシルバニア大学にて資料調査／運営費交付金
●惠谷　浩子：アメリカ合衆国／ '11.9.26～10.2／アメリカ合衆国における文化的景観保全制度と運用状況に関する調査／運営費交付金
●金田　明大：カザフスタン共和国／ '11.9.27～10.19／ユネスコ・シルクロード世界遺産登録関連ドキュメンテーション事業の調査／運営費交付金
●佐藤　由似：カンボジア王国／ '11.9.27～11.18／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●平澤　毅：大韓民国／ '11.9.28～10.1／第５回新羅学国際学術大会への出席・講演等／先方負担
●箱崎　和久：大韓民国／ '11.10.4～10.8／国際学術セミナー「東アジア古代寺址および古代庭園」への出席／先方負担
●高橋　知奈津：大韓民国／ '11.10.4～10.8／国際学術セミナー「東アジア古代寺址および古代庭園」への出席／先方負担
●小澤　毅：キルギス共和国／ '11.10.4～10.19／文化庁受託「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の一環として実施される人材育成事業における講義／東京文化財研究所
●井上　和人：キルギス共和国／ '11.10.10～10.13／文化庁受託「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の一環として実施される人材育成事業における講義／運営費交付金
●小野　健吉：キルギス共和国／ '11.10.10～10.16／文化庁受託「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の一環として実施される人材育成事業における講義／運営費交付金
●森本　晋：キルギス共和国／ '11.10.10～10.17／キルギス国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所ほかの収蔵遺物見学ならびに関連遺跡の踏査／運営費交付金
●芝　康次郎：キルギス共和国／ '11.10.10～10.19／文化庁受託「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の一環として実施される人材育成事業における講義／東京文化財研究所
●鈴木　智大：中華人民共和国／ '11.10.11～10.15／日中韓建築文化遺産保存国際会議への出席／運営費交付金・先方負担
●箱崎　和久：中華人民共和国／ '11.10.11～10.22／日中韓建築文化遺産保存国際会議への出席、第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●大林　潤：中華人民共和国／ '11.10.11～10.22／日中韓建築文化遺産保存国際会議への出席、第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●北山　夏希：中華人民共和国／ '11.10.11～10.22／日中韓建築文化遺産保存国際会議への出席、第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●杉山　洋：カンボジア王国／ '11.10.12～10.19／アンコールトム内仏教テラスの研究／大成建設自然歴史基金
●林　良彦：中華人民共和国／ '11.10.15～10.22／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費

●小野　健吉：カザフスタン共和国／'11.10.16～10.19／文化庁受託「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の一環として実施される人材育成事業における講義／運営費交付金
●森本　晋：タイ／'11.10.18～10.22／太平洋近隣有効協会年次大会（PNC）'11に出席発表／科学研究費
●中川　二美：中華人民共和国／'11.10.18～10.24／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●石田　由紀子：中華人民共和国／'11.10.18～10.24／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●今井　晃樹：中華人民共和国／'11.10.18～10.24／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●清野　孝之：中華人民共和国／'11.10.18～10.24／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●平澤　毅：大韓民国／'11.10.19～10.22／名勝の保存と保全に関する国際ワークショップへの出席・発表等／先方負担
●児島　大輔：中華人民共和国／'11.10.22～10.29／陝西省西安市および彬県における資料調査・踏査および資料収集／出光文化財団助成金
●松井　章：イギリス／'11.10.24～10.30／在英日本大使館において文化財レスキューの講演、セインズベリー日本芸術研究所にて共同研究の打ち合わせ／先方負担
●井上　和人：中華人民共和国／'11.10.27～10.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●中川　二美：中華人民共和国／'11.10.27～10.31／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●石田　由紀子：中華人民共和国／'11.10.27～10.31／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●鈴木　智大：中華人民共和国／'11.10.27～10.31／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●井上　麻香：中華人民共和国／'11.10.27～10.31／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●田村　朋美：大韓民国／'11.10.27～11.1／武寧王陵発掘４０周年記念講演会で講演／先方負担・科学研究費
●馬場　基：大韓民国／'11.11.4～11.7／韓国木簡学会大会報告／先方負担
●桑田　訓也：大韓民国／'11.11.4～11.7／韓国木簡学会大会参加／木簡学会
●諫早　直人：中華人民共和国／'11.11.5～11.9／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／運営費交付金
●清野　孝之：中華人民共和国／'11.11.5～11.9／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／東京文化財研究所
●庄田　慎矢：中華人民共和国／'11.11.5～11.12／科学研究費による調査研究のため国際学術会議「全球視野下的青銅時代」における研究発表／科学研究費
●石村　智：台湾・フィリピン／'11.11.6～11.14／台湾における初期オーストロネシア語族の遺跡の調査、およびフィリピン、マニラで開催されるAsia Pacific Regional Conference on Underwater Cultural Heritageにて座長および研究発表／科学研究費
●加藤　真二：中華人民共和国／'11.11.7～11.9／遼寧省文物考古研究所との研究・展示に関する調整と協議／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／'11.11.12～11.29／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●田代　亜紀子：インドネシア・ベトナム／'11.11.15～12.1／「ヘリテージツーリズムによる地域の文化遺産マネジメントに関する研究」調査および第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／科学研究費・運営費交付金
●諫早　直人：大韓民国／'11.11.20～11.27／日韓共同研究「日本列島における金工品生産と新羅」にもとづく調査研究／運営費交付金・先方負担
●石村　智：ミクロネシア連邦／'11.11.20～11.28／ミクロネシア連邦ナン・マドール遺跡の保護に資する人材育成ワークショップ／先方負担
●青木　敬：中華人民共和国／'11.11.22～11.27／河南省・河北省への資料調査／運営費交付金
●難波　洋三：中華人民共和国／'11.11.22～11.27／河南省・河北省への資料調査／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／'11.11.22～11.27／河南省・河北省への資料調査／運営費交付金
●玉田　芳英：中華人民共和国／'11.11.22～11.27／河南省・河北省への資料調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／'11.11.22～11.27／河南省・河北省への資料調査／運営費交付金
●森川　実：中華人民共和国／'11.11.22～11.27／河南省・河北省への資料調査／運営費交付金
●北山　夏希：ベトナム社会主義共和国／'11.11.22～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●中川　二美：ベトナム社会主義共和国／'11.11.22～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●児島　大輔：ベトナム社会主義共和国／'11.11.22～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●大林　潤：ベトナム社会主義共和国／'11.11.22～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●清野　孝之：ベトナム社会主義共和国／'11.11.24～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●番　光：ベトナム社会主義共和国／'11.11.24～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／'11.11.27～11.30／第一次大極殿院復原にかかる類例建築調査／業務委託経費
●青木　敬：大韓民国／'11.12.2～12.4／チャラボン古墳発掘調査見学および古代土木技術関連資料の収集／科学研究費
●脇谷　草一郎：中華人民共和国／'11.12.5～12.9／国際会議「伝統技術の継承と人材養成-石とレンガの修理技術」に出席／運営費交付金
●佐藤　由似：カンボジア王国／'11.12.5～12.30／アンコール遺跡群西トップ遺跡建築装飾群の修復・復元／運営費交付金
●田村　朋美：中華人民共和国／'11.12.7～12.9／国際会議「伝統技術の継承と人材養成-石とレンガの修理技術」に出席同済大学研究協定の協議／運営費交付金
●髙妻　洋成：中華人民共和国／'11.12.7～12.9／国際会議「伝統技術の継承と人材養成-石とレンガの修理技術」に出席同済大学研究協定の協議／運営費交付金
●降幡　順子：中華人民共和国／'11.12.7～12.9／国際会議「伝統技術の継承と人材養成-石とレンガの修理技術」に出席／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／'11.12.8～12.27／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／'11.12.9～12.15／湖北省における失蝋法関連遺物の資料調査／科学研究費
●井上　和人：カンボジア王国／'11.12.12～12.16／西トップ事業アプサラとの覚書締結式出席／運営費交付金
●渡辺　晃宏：大韓民国／'11.12.14～12.16／木簡に関する日韓共同研究／先方負担
●桑田　訓也：大韓民国／'11.12.14～12.16／木簡に関する日韓共同研究／運営費交付金・先方負担
●森先　一貴：ロシア連邦／'11.12.16～12.22／ロシア連邦ハバロフスク地方コン

ドン１遺跡出土遺物の調査・研究／科学研究費
●加藤　真二：中華人民共和国／ ’11.12.18～12.26／科学研究費による中国細石刃石器群の調査／科学研究費
●芝　康次郎：中華人民共和国／ ’11.12.18～12.26／科学研究費による中国細石刃石器群の調査／科学研究費
●青木　敬：大韓民国／ ’11.12.19～12.22／日韓共同研究にともなう資料調査／運営費交付金・先方負担
●廣瀬　覚：大韓民国／ ’11.12.19～12.22／日韓共同研究にともなう資料調査／運営費交付金・先方負担
●若杉　智宏：大韓民国／ ’11.12.19～12.22／日韓共同研究にともなう資料調査／運営費交付金・先方負担
●箱崎　和久：ベトナム社会主義共和国／ ’11.12.22～12.30／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●大林　潤：ベトナム社会主義共和国／ ’11.1.22～12.30／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●栗山　雅夫：ベトナム社会主義共和国／ ’11.12.22～12.30／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●高橋　知奈津：ベトナム社会主義共和国／ ’11.12.22～12.30／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●林　良彦：ベトナム社会主義共和国／ ’11.12.26～12.31／ベトナム国ドンナイ省フーホイ・ティエンザン省カイベ―の集落調査および類例調査／昭和女子大学
●児島　大輔：中華人民共和国／ ’11.12.28～12.31／中国国家博物館・北京石刻芸術博物館等における資料調査／運営費交付金
●田代　亜紀子：インドネシア／ ’12.1.2～1.11／平成２３年度文化庁受託「西スマトラ州パダンにおける歴史的地区日債文化遺産復興支援（専門家交流）」ワークショップ参加／東京文化財研究所
●杉山　洋：ベトナム社会主義共和国／ ’12.1.5～1.7／日本ユネスコ信託基金タンロン皇城跡保存事業ワークショップ参加／東京文化財研究所
●加藤　真二：中華人民共和国／ ’12.1.5～1.7／科学研究費による調査打ち合わせ／科学研究費
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／ ’12.1.5～1.8／日本ユネスコ信託基金タンロン皇城跡保存事業ワークショップ参加／東京文化財研究所
●石村　智：ベトナム社会主義共和国／ ’12.1.5～1.8／タンロン皇城遺跡保存支援国際協力／東京文化財研究所
●佐藤　由似：カンボジア王国／ ’12.1.7～3.21／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／ ’12.1.13～1.21／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●田村　朋美：カンボジア王国／ ’12.1.16～1.20／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●髙妻　洋成：カンボジア王国／ ’12.1.16～1.20／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●脇谷　草一郎：カンボジア王国／ ’12.1.16～1.20／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●小野　健吉：カンボジア王国／ ’12.1.25～1.30／アンコール・ワット及びその周辺の水景観等の調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア／ ’12.2.7～2.25／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／運営費交付金
●石村　智：カンボジア／ ’12.2.12～2.24／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／運営費交付金
●田代　亜紀子：インドネシア・カンボジア／ ’12.2.12～2.28／科研「ヘリテージツーリズムによる地域の文化遺産マネジメントに関する研究」調査および拠点交流事業調査／科学研究費
●森本　晋：カザフスタン共和国／ ’12.2.14～2.18／カザフ国立大学収蔵考古資料の調査／運営費交付金
●芝　康次郎：カザフスタン共和国／ ’12.2.14～2.18／カザフ国立大学収蔵考古資料の調査／運営費交付金
●森先　一貴：ロシア連邦／ ’12.2.19～2.23／ロシア連邦沿海地方新石器時代遺跡出土遺物の調査／高梨学術奨励基金
●髙妻　洋成：ベトナム／ ’12.2.19～2.23／ベトナム・タンロン皇城遺跡保存に係る現地調査に参加／東京文化財研究所
●脇谷　草一郎：ベトナム／ ’12.2.20～2.24／ベトナム・タンロン皇城遺跡保存に係る現地調査に参加／東京文化財研究所
●田村　朋美：カンボジア／ ’12.2.20～2.25／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／運営費交付金
●松井　章：エルサルバドル・グアテマラ／ ’12.2.23～3.2／名古屋大学がおこなう中米遺跡発掘の環境考古学的調査の指導／名古屋大学
●森本　晋：イギリス・フランス／ ’12.2.25～3.4／バーミヤン遺跡群ならびに中央アジア遺跡調査関係資料のデータ化のための調査／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／ ’12.2.28～3.4／科学研究費による中国細石刃文化の基礎的研究のための史料調査／科学研究費
●杉山　洋：カンボジア・ベトナム／ ’12.3.6～3.25／西トップ遺跡の調査研究／東京文化財研究所・寄付金
●石村　智：カンボジア／ ’12.3.7～3.10／カンボジア・西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●難波　洋三：カンボジア・ベトナム／ ’12.3.7～3.11／西トップ寺院修復工事起工式出席・タンロン皇城遺跡保存事業視察／運営費交付金・東京文化財研究所
●田代　亜紀子：ベトナム／ ’12.3.9～3.12／ベトナム・タンロン皇城遺跡保存事業協議／東京文化財研究所
●小野　健吉：イタリア／ ’12.3.17～3.25／イタリアにおける庭園等の調査／京都大学
●小池　伸彦：中華人民共和国／ ’12.3.19～3.23／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」嶺寺遺跡出土瓦調査・共同研究計画に関する協議／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／ ’12.3.19～3.23／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」嶺寺遺跡出土瓦調査・共同研究計画に関する協議／運営費交付金
●森先　一貴：中華人民共和国／ ’12.3.19～3.23／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」嶺寺遺跡出土瓦調査・共同研究計画に関する協議／運営費交付金
●木村　理恵：大韓民国／ ’12.3.19～3.23／韓国出土唐三彩の調査／運営費交付金
●玉田　芳英：大韓民国／ ’12.3.19～3.23／韓国出土唐三彩の調査／運営費交付金
●小田　裕樹：大韓民国／ ’12.3.19～3.23／韓国出土唐三彩の調査／運営費交付金
●森川　実：大韓民国／ ’12.3.19～3.23／韓国出土唐三彩の調査／運営費交付金
●若杉　智宏：大韓民国／ ’12.3.19～3.23／韓国出土唐三彩の調査／運営費交付金
●難波　洋三：大韓民国／ ’12.3.19～3.23／韓国出土唐三彩の調査／運営費交付金
●森本　晋：カンボジア／ ’12.3.20～3.23／カンボジア・西トップ遺跡修復事業に参加／運営費交付金

公開講演会

東京講演会

2011年12月3日

◆松井　章：大津波と三陸沿岸の埋蔵文化財―東日本大震災被災文化財の救出―

3.11の東日本大震災後、奈文研も4月20日から石巻文化センターを皮切りに文化財レスキュー活動に参加した。津波に流されたり塩水に浸かったりした文化財、特に古文書はカビや微生物による劣化が進む梅雨や夏を前に、避難場所を確保し、適切な応急処置をすすめる必要があった。レスキュー活動でも奈文研は、人員の派遣や被災した紙資料の保存処理等で中核的役割を果たすことができた。文化財レスキュー活動は移動が可能な「動産」文化財が中心だったが、「不動産」文化財、つまり住民の高所移転等の埋蔵文化財のレスキュー、「緊急発掘」はこれからである。

◆髙妻　洋成：大津波で被災した文書を救え! ―保存修復科学の貢献―

東日本大震災の津波等で水損した文書類は、カビや腐敗による損傷を受けやすく、迅速なレスキューが求められていた。膨大な量にのぼるこれらの水損文書類のレスキューはNPO団体から公的機関にいたる様々な団体によりおこなわれてきている。奈良市場冷蔵株式会社による冷凍倉庫と輸送システムの提供や水損文書の応急処置のための技術的な支援がおこなわれ、多くの水損文書が救援された。日本は毎年のように災害が起こる災害大国である。地域の大切な「文化財」を守り、災害時に迅速にかつ安全に救うための危機管理体制の早急な確立が必要である。

◆杉山　洋：アンコール西トップ遺跡の修復―カンボジアでの文化遺産活用支援―

日本として文化協力を大きく推し進めることになったのが、1992年に内戦が終結したカンボジアの国内復興であった。1993年に文化復興のための「アンコール遺跡救済国際会議」が東京で開催され、日本からも外務省、文化庁等が調査チームを派遣した。奈文研では1993年からカンボジアとの共同研究事業に着手し、現在アンコール・トム内西トップ遺跡で調査修復活動を続けている。こうした活動の具体的な内容を説明するとともに、現地への見学ツアーの催行をはじめとする情報公開の現状を報告した。

◆井上　和人：ハノイ・タンロン皇城遺跡の宮殿遺構―日越国際協力で調査研究保護をめざす―

ベトナムの首都ハノイの中心部で壮大な宮殿遺構群がみつかったのは、2002年から翌年にかけてのベトナム社会科学院考古学院の発掘調査を通じてであった。ベトナム民族初の継続的王朝である李朝のタンロン皇城が長い眠りから目覚めたのである。発掘の原因は李朝樹立1000周年の2010年を目ざして、国会議事堂を建設しようとしたことにあった。以後、さまざまな紆余曲折を経て、日本の専門家チームとして、ユネスコの事業と位置づけられたタンロン皇城の調査・研究・保存にかんする支援事業を今日なお展開しつつあるが、その経緯と実情を報告した。

◆森本　晋：バーミヤーン仏教遺跡の保護―厳しい状況下での国際支援事業の展開―

アフガニスタンのバーミヤーンにおいて大仏をはじめとする遺産が爆破・破壊されてから10年を越える年月が流れた。世界遺産「バーミヤーン渓谷の文化的景観と考古遺跡群」保存のための、緊急の対策がユネスコ文化遺産保存日本信託基金によって進められており、東京と奈良の文化財研究所もそれぞれの予算も活用して、壁画の保存、守るべき考古遺跡の範囲の確定の作業に協力している。修復技術者の養成、考古学者への技術指導といった人材育成は、日本隊がおこなった貢献の大きな部分を占めている。

◆降幡　順子：高松塚古墳・キトラ古墳壁画を守る―古墳壁画の保存修理―

「高松塚古墳・キトラ古墳壁画を守る―古墳壁画の保存修理―」というタイトルで、両古墳壁画の解体作業・取り外し作業後にどのような修理作業がおこなわれているのかについて紹介した。古墳壁画は、博物館環境が維持されている仮設修理施設にて現在は保管され、壁画面の現状記録とともに、漆喰の強化作業・カビ等のクリーニング作業がおこなわれている。これらの作業に使用している樹脂や処理方法が、両古墳壁画では異なる部分のあること、解体作業・取り外し作業後から現在まで、どのくらい壁画面に変化があるのか、更にキトラ古墳壁画では画面の再構築作業も進行していること等を紹介した。

第108回公開講演会

2011年6月18日

◆田辺所長　ミニ講演：考古学すんわ⑫―東日本大震災文化財レスキューについて―

◆廣瀬　覚：石槨構築技術からみた高松塚古墳

高松塚古墳の石槨に使用され凝灰岩を詳細に観察した結果、「切石」とよばれる凝灰岩の直線加工の本質が、朱線による割付けとチョウナによる連続的な敲打という堅実な作業の積に重ねにあることが判明した。この点を踏まえた上で、個々の石材と石槨全体との規格性を検討した結果、高松塚古墳の石槨では、一つ一つの石材を十分規格化しない一方で、その差を石槨全体の設計規格の中で合理的に解消している点があきらかとなった。石材の切出しから石槨の完成にいたるまでの一貫した高度な技術の存在をみてとることができる。

◆青木　敬：古代土木技術の系譜を探る

日・中・韓における掘込地業の構築技術の分析から、土木技術系譜の解明を目的とする。分析の結果、掘込地業には版築を用いるものと用いずに礫を多用するもの、さらに前者では基壇部分と掘込地業部分で質の異なる土で版築するものと、全体を均質な土で版築するものとに細分した。各分類の分布を瞥見すると、南北朝時代の中国では、いずれも版築を用いるが、礫の多様と質の異なる土を使い分ける事例とが南朝と北朝による地域差と予想し、それらが版築を用いる百済、礫を多用する新羅の差異に起因するとした。更に日本には、まず百済の技術が将来され、7世紀代の主流であったことをあきらかにした。

第109回公開講演会

2011年10月15日

◆松村所長　ミニトーク：川原寺の湯釜

◆丹羽　崇史：東アジアにおける失蝋法の展開―鋳造技術からみた中国・朝鮮・日本―

失蝋法とは、蝋を用いて原型を製作し、鋳物土に包んだのちに加熱して蝋を溶かして、鋳造に用いる鋳型を製作する技術である。失蝋法によって製作されたことが想定される金属製品は、中国、朝鮮半島、日本をはじめ、東アジア各地で知られている。本講演では、中国、朝鮮半島、日本の失蝋法に関するこれまでの研究を整理し、東アジアにおける失蝋法の歴史的な展開を検討した。その結果、失蝋法の製作の対象となる製品や具体的な製作方法等が各地で異なっており、蝋を用いるという共通した鋳造技術が導入されながらも、その使用方法は非常に多様であることが理解できる。

◆番　光：春日座大工の大工道具

奈良市の民家から、100点以上におよぶ

大工道具類が発見された。この家は、中世から近世の興福寺と春日社の造営を独占した工匠集団である春日座大工として、19世紀まで遡れる家柄である。また、春日社造営に関する文書も合わせて伝えられており、発見された大工道具は近世まで遡るとみられる。この大工道具は管見の限り、近世大工道具伝世品の一括資料としては5例目、特に宮大工の使用したものに限ると周防国分寺造営大工道具、桃山天満宮所蔵大工道具に次ぐ3例目の事例である。道具群は点数・種類ともに豊富で、鉋や鑿、造作材用鋸の種類・点数の多く、鏨等仕上げに関する道具が多様で、宮大工らしい編成を示している。

研究集会

◆庭園の歴史に関する研究会

2011年10月29日

文化遺産部遺跡整備研究室では、庭園にかんする調査研究をおこなっており、平成23年度からの第3期中期計画においては、中世庭園の研究に取り組んでいる。2011年度は鎌倉時代の庭園を対象とし、「鎌倉時代の庭園―京と東国―」をテーマに『庭園の歴史に関する研究会』を平城宮跡資料館小講堂で開催した。

研究会には庭園史学・造園学の研究者のほか、考古学、文献史学、美術史学、建築史学の専門家が参加し、さまざまな角度から鎌倉時代庭園について検討した。前半は各分野の研究者が研究発表を、後半はそれらの発表をふまえて討議をおこなった。

研究発表では、京都における鎌倉時代庭園、東国における鎌倉時代庭園、建築史における鎌倉時代庭園、絵画資料の読み解き方等についての報告があった。

総合討議では、まず「京都における平安時代の庭園と鎌倉時代の庭園の違い」について、続いて「京都の庭園と東国の庭園の関係」について、意見が交わされた。

また、この研究会の報告書を2012年3月に刊行した。（青木 達司）

◆文化的景観研究集会（第4回）

2011年12月16日～17日

文化的景観制度の発足から6年以上を経過し、初期的な問題が出揃いつつある状況をふまえ、今年度の文化的景観研究集会を「文化的景観の現在－保護行政・学術研究の中間総括」という主題で開催した。全国の行政担当者、研究者等164名の参加を得た。

文化的景観の制度運用と、関連する学術研究の中間総括を意図した本研究集会では、各報告者からの報告と総合討議における議論の内容に、一定の認識の共有が感じられた点に、制度の進捗をみることができた。すなわち、文化的景観を単に保全に留めずに地域づくりのツールとして使っていくこと、制度を越えた総合施策として取り組んでいくこと、といった方向性である。同時に、制度と理念の懸隔、学術と保護の横断、継続的総括の必要、といった本質的な問題もあらためて確認された。奈良文化財研究所としても、総括を継続し、文化的景観の学術的基盤の形成に勤めていきたい。

（清水 重敦）

◆保存科学研究集会

2011年12月21日～22日

東日本大震災では、多くの尊い生命と日常の生活が失われると同時に、多くの文化財も甚大な被害を受けた。被災した文化財をできる限り救い出すためにおこなわれたレスキュー活動を通して、様々な経験の蓄積とともに多くの問題点もあきらかとなってきている。地震による災害だけではなく、水害もまた頻発しており、日本は災害大国と言っても過言ではない状況にある。本年度の保存科学研究集会は、『被災文化財のレスキュー　―保存科学の果たすべき役割と課題―』をテーマに二日間にわたり開催した。研究集会には、実際に文化財レスキュー活動をおこなった方々に講演を依頼し、レスキュー体制の構築と事業の実施、機動的なレスキュー活動、多くの団体の連携、被災資料の応急処置等、多くの事例紹介をいただいた。総合討議では、文化財レスキューの問題点、応急処置の技術的な検討、災害に対する危機管理等について活発な議論がおこなわれた。（高妻 洋成）

◆遺跡等マネジメント研究集会（第1回）

2012年2月16日～17日

2006年度から2010年度まで計5回開催した「遺跡整備・活用研究集会」の成果をふまえ、2011年度から新たに立ち上げた「遺跡等マネジメント研究集会」の第1回では、『自然的文化財のマネジメント』を全体テーマとして、韓国からの研究者2名を招聘し、日韓国際研究集会（通訳有り）のかたちで開催した。

基調講演「文化財と自然」をはじめとして、「天然記念物という文化財」、「韓国における自然遺産の現況及び動向」の3つの講演（16日）、そして、動物・植物・地質鉱物の切り口を中心として、「コウノトリ悠然と舞う　ふるさと」、「韓国の『村の森』について」、「糸魚川ジオパーク　―自然的文化財の保護・活用―」の3つの報告（17日）の下、会場からの質問票にもとづき、自然的文化財の把握と評価、調査研究と保護対策、活用の観点、管理運営等の体制等の論点を立て、ディスカッションをおこなった。（平澤 毅）

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築

代表者・渡辺 晃宏　基盤研究（S）継続

木簡解読支援システムでは、木簡の情報を蓄積・整理するアノテーションツール（前年度開発）にインタラクティブな画像処理技術を実装し、その有用性を向上させた。また、字形判別手法の実装・検証に用いる文字画像の数を増やすことで対応字種を増加させるとともに、古代木簡画像に特有の色分布を解析することで字形抽出・判別の精度を効果的に高めることに成功した。

研究拠点データベースでは、2011年12月に、「木簡字典」のフラッシュ化と、画像データベース「墨書土器字典」の開発・公開を実現した。また、フラッシュ化とテキストデータのXML化によって、より使い易く便利なデータベースへ高次化を図ることができた。「墨書土器字典」は、「木簡字典」をベースに墨書土器の資料的特性を考慮して新たに開発したデータベースで、奈文研HP上で公開している。平城宮跡出土のもののほか、静岡県伊場遺跡群出土の資料もアップすることができた。

◆ミリ波およびテラヘルツ波を用いた文化財の新たな非破壊診断技術の開発研究

代表者・髙妻 洋成　基盤研究（A）継続

プロトタイプのミリ波イメージング装置に対して、出力を調整することによる改良をおこなった。人工的に多孔質とした漆喰試料において、テラヘルツ波分光イメージングにより検出可能な空隙サイズを検討した。種々の顔料サンプルのテラヘルツ分光スペクトルの標準データの蓄積をおこなった。また、談山神社に所蔵されている嘉永の大修理の際に作られたとされる彩色塗装手板に対して蛍光X線元素分析とあわせて、テラヘルツ分光イメージングを適用し、その彩色および塗装の構造をあきらかにすることができた。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究

代表者・松井 章　基盤研究（A）継続

2011年度は、北九州市小倉城、大分市

大友府内遺跡、長崎県壱岐市カラカミ遺跡等から出土したイノシシ／ブタやニワトリ遺存体の研究をおこなった。また、現生骨格標本の3D計測化をすすめつつある。8月には台湾樹谷財団と共同で、台南サイエンスパーク予定地から出土した動物遺存体の検討をおこない、韓国、中国とも共同研究を進めつつある。日本人類学会沖縄大会において「先史時代 琉球列島へのイノシシ・家畜ブタ導入に関する動物考古学的研究: 古DNA・形態解析から」と題して、これまでの成果の一部を連名で発表した。

◆南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡　基盤研究（B）継続

本研究は、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から移動した状態で現在保管されている資料群の性格を追求するものである。2011年度は、現在東大寺図書館が保有している中村準一寄贈文書の、明治維新期の日記の翻刻を進めた。中村家は興福寺の唐院承仕をつとめた家柄である。その日記を読み解くことにより、その時期の興福寺・南都諸寺の動向をより明確にしたいと考えているところである。なお、2011年度科研は繰越申請をしており、新年度に入ってから東大寺所蔵文書聖教の調査を実施する予定である。

◆文化財および美術工芸材料のナノ構造・物性の解明

代表者・北田 正弘　基盤研究（B）継続

本研究では、主に透過電子顕微鏡を用いて文化財および美術工芸品のナノサイズまでの微細構造と関連物性の研究を進めている。2011年度は、紀元前の銅製品、紀元前後の銅および銀製品、鉄製品、日本刀・西洋刀、螺鈿、染料・顔料、陶磁器顔料、建築石材等を対象に観察と解析をおこなった。たとえば、紀元前~17世紀ルリスタン出土の銅剣中の鉄不純物粒子は20-30nmで、高飽和磁界を示す。黄蝶貝の多層構造は0.3-0.7 μmで周期的な層厚ばらつきがあるため、波長範囲の広い光が外部に反射されて淡い虹色になる。また、成長時に導入された数10nmの格子欠陥が存在する。

◆中国細石刃文化の基礎的研究―河南省霊井石器群の分析を中心として―

代表者・加藤 真二　基盤研究（B・海外）

2011年度も引き続き、霊井遺跡出土石器群の実測図作成をすすめた。また、それにともない分類、出土点数、出土重量等も確定した。関連資料として、河北省、山東省、江蘇省、寧夏自治区、甘粛省等の細石刃石器群の実測、観察、写真撮影等もおこなった。更に、夏には中国・韓国の研究者を招聘し、北海道の細石刃石器群との比較研究、研究調整、講演等をおこなった。研究成果の一部を、第4回アジア旧石器協会シンポジウム（東京）等の国際学会で発表するとともに、『旧石器研究』、『華夏考古』に投稿、2012年度での掲載が決定されている。

◆青銅製祭器の生産と流通からみた弥生時代の社会変化の研究

代表者：難波 洋三　基盤研究（C）継続

2011年度は当研究の成果に基づく銅鐸展が、大阪府立弥生文化博物館と滋賀県立安土城考古博物館で開催され、古式と新式の銅鐸の群の変遷と銅鐸の流通についての論文をそれぞれ、図録に掲載した。また、長野県柳沢遺跡出土の銅鐸と大阪湾型銅戈に関して、それらの製作地や流入経路、中部高地での青銅器祭祀の開始の歴史的背景、この地域で出土する石戈との関係等を検討し、その成果を論文としてまとめ、この遺跡の発掘調査報告書に掲載した。

◆古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦　基盤研究（C）継続

2011年度は、鉛を用いる灰吹法との関連から、平城宮第70次調査出土の金粒付着坩堝（取瓶）の用途について詳細に分析・検討した。その結果①金の熔解、②銅と金の合金熔解、③金の熔解と銅の熔解個別併用、④金の精製、の4つの可能性が考えられた。また、飛鳥池遺跡出土小型金熔解坩堝との比較検討を進めた。

◆奈良県「飛鳥・藤原」地域における「方格地割」創出過程の考古学的新研究

代表者・黒崎 直　基盤研究（C）継続

6世紀末から8世紀初頭の飛鳥・藤原地域には「首都機能」を支える諸施設が造営されたが、それらの配置を律した「都市計画」の存否については議論がある。本研究では、道路や宮殿・寺院跡の中軸線や区画施設等発掘された遺構を再整理、再評価することにより、当時の「方格地割」を復元することを目指した。

その結果、飛鳥・藤原地域には1/5里（約106m）と1/4里（約132m）を基準寸法とする2種類の方格地割が、時期と範囲を違えて施工されたことをあきらかにした。なお、研究成果として『飛鳥の都市計画を解く』（同成社）を刊行した。

◆古代律令国家の官衙と寺院の占地に関する比較研究

代表者：小澤 毅　基盤研究（C）継続

本研究は、日本の古代律令国家における官衙と寺院がいかなる場所に造営され、占地上、どのような関係を有していたかを検討し、立地面の特性とそれが果たした政治的な役割を解明することを目的としている。三年目にあたる本年度は、畿内および東海道・東山道諸国の官衙・寺院遺跡を対象として、資料の収集をおこなった。

◆発掘調査成果の総合的な機械可読化に関する研究

代表者・森本 晋　基盤研究（C）継続

2011年度は最終年度として、遺構情報に関しては、遺構情報からの遺構再現に関する事例調査を追加しておこなうとともに、情報記述型式の検討をおこなった。また、遺物情報に関しては、遺物の種類ごとに実測図の構造の分析を続行し、記述の意味と階層性の検討をおこなった。報告書の文章記述の電子化についても分析をおこない、成果のとりまとめを進めた。

◆古代ガラス・釉薬から探る製作技術に関する科学的研究

代表者・降幡 順子　基盤研究（C）継続

本研究は、古代ガラス・釉薬の材質とその物性に着目して製作技術に関する変遷をあきらかにすることを目的としている。2011年度は東海地方を中心とした鉛釉陶器、窯跡出土資料および窯道具等の調査をおこなった。更に12世紀のガラス製品および坩堝等の関連資料に対して分析調査を実施した。考古学的な知見と原材料との関連をあきらかにするとともに、ガラスと釉薬で使用されている鉛原材料の差異に関する知見を得ることができた。また、化学組成を変化させガラス転移温度に関する物性調査を実施した。

◆近世建築に使われた木曽ヒノキの流通に関する年輪年代学的研究

代表者　光谷 拓実　基礎研究（C）継続

本研究は、木曽ヒノキの年輪データで作成した暦年標準パターンを応用して、日本各地に所在する近世建築の用材を年輪年代学的に調査し、当初流通していた木曽系ヒノキの流通を復原的にあきらかにすることを目的とする。

本年度は、重要文化財西教寺客殿、重要文化財園城寺一切経蔵、重要文化財聖衆来迎寺客殿、重要文化財清水寺子安塔等の調査をおこなった。調査部材が木曽系ヒノキかどうかの詳細な検討は現在継続中である

が、これまでのところ建具類や化粧材等に選択的に使用されている傾向がうかがえる。

◆中国における木質文化財の用材観

代表者・伊東 隆夫　基盤研究（C）新規

2011年度は中国江蘇省の揚州にある研究所を訪問し、主に漢代、ほかに五代―宋、随代から出土した89点の遺跡出土木材の提供を受けた。遺物は主に木棺や木俑であった。樹種同定により、Phoebe属、コウヨウザン（中国名では杉木）、キササゲ属の樹種等が検出されている。一方、江蘇省にある一都市の博物館をも訪問し、23点の遺跡出土木材の提供を受けた。遺物の名称や出土場所の資料は次回訪問時に提供を受けるが、主にPhoebe属、キリ属、コウヨウザン、ツゲ属、アカガシ亜属等が検出されている。

◆東北アジアにおける金属器の拡散と在地社会の変化に関する考古学的研究

代表者・庄田 慎矢　若手研究（A）新規

本研究は、近年暦年代の根本的な見直しが進む東北アジアにおける金属器拡散のシナリオを再構成し、同地域における金属器受容の特性を人類史的に位置づけようとするものである。初年度にあたる今年は、朝鮮半島、中国東北地方、ロシア沿海地方、日本列島における金属器受容期の石器生産について検討し、西北ヨーロッパと比較した。また、成果の一部を中国陝西省宝鶏市で開かれた国際会議『全球視野的青銅時代 Emergence of Bronze Age Societies – A Global Perspective』において発表した。

◆古代中世東アジアにおける八角塔・八角堂の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久　若手研究（B）・継続

最終年度にあたり、これまでの検討成果のまとめをおこなった。方形木塔と八角木塔の建物規模を検討すると、八角木塔では基壇規模からの類推で明確でないものも多いけれども、面積的には八角塔の方が大きいが、建物一辺の長さは方形木塔と大きく変わらないのではないかとの見通しを得た。西大寺八角塔の規模がやや大きいのも、奈良時代の方形木塔の規模が大きいことと、時期的にも符合してくる。これは八角木塔の設計法とも関わる新たな課題の発見と言える。

◆オセアニア島嶼環境へのラピタ人の適応戦略を探る先史学的研究

代表者・石村 智　若手研究（B）継続

本研究ではオセアニアの島嶼環境に人類史上初めて拡散したラピタ人の適応戦略を、その資源利用および集落立地の観点から解明しようというものである。その手法として、これまで解析してきた考古学データに加え、現在のオセアニア地域の伝統的集落の景観についての民族考古学的データもあわせ、通時的モデルの確立を目指す。2011年度は、フィジー・トンガ・サモア地域における遺跡周辺の環境と伝統的集落の景観との比較・解析をおこなった。加えて周辺地域である台湾・フィリピン・ミクロネシアにおいても比較データの収集をおこなった。

◆古代日韓における土木技術の系譜にかんする考古学的研究

代表者・青木 敬　若手研究（B）継続

本研究は、６・７世紀における古墳・寺院・都城等土木構造物の築造技術について、日韓双方の調査事例を精査し、比較検討する。2011年度も発掘調査報告書をもとに日韓双方の事例収集と検討を継続したが、国内のみならず韓国にも資料調査に赴き、数多くの知見を得た。資料収集も収束し、一定の見通しを得たため、土木技術の分類や系譜についてこれまでの研究成果を２本の論文にまとめた。また、掘込地業の土木技術系譜の復元については、奈良文化財研究所第108回公開講演会、掘立柱建物の造営技術については、第15回古代官衙・集落研究会にて発表もおこなった。

◆東アジアにおける失蠟法の出現と展開に関する考古学的研究

代表者・丹羽 崇史　若手研究（B）継続

本研究は、主に考古遺物の検討から東アジアにおける失蠟法技術の出現・展開過程を解明することを目的とする。

2011年度は、12月９日～15日に、中華人民共和国湖北省に出張し、湖北省博物館等が所蔵する失蠟法関連遺物の調査をおこなったほか、関係者と協議を進めた。また、８月30日～９月１日には、中国、日本の共同研究者とともに、日本国内の機関が所蔵する中国青銅器の調査を実施した。本年度担当した奈文研公開講演会（10月15日）では、「東アジアにおける失蠟法の展開―鋳造技術からみた中国・朝鮮・日本―」と題した講演をおこない、これまでの研究成果の一部を発表した。

◆古代東アジアにおける都城と葬送地に関する考古学的研究

代表者・小田 裕樹　若手研究（B）継続

本研究は、古代都城の成立と共に設置されたと考えられる都城の「葬送地」の実態について考古学的にあきらかにすることを目的とする。

研究計画の三年目にあたる2011年度は国内の国府と墓域との関係について資料収集を進め、豊前・豊後地域を対象に資料調査・遺跡踏査をおこなった。また、中国・韓半島の墳墓・墓誌資料について、引き続き調査報告等の文献収集をおこなった。

なお、研究成果の一部について、「墓構造の比較からみた古代火葬墓の造営背景」（『日本考古学』第32号）として発表した。

◆校倉造りの歴史的変遷と地域特性に関する研究

代表者・黒坂 貴裕　若手研究（B）継続

2011年度は、まず、校倉の地域特性の調査調査として、九州地方の事例を調査し、技術の共通性や独自性について確認した。次に、古代の校木の木取りでは比較的芯持材が多いとされていたが、調査によって、遺跡出土の推定校木等で芯去材の事例を増やすことになった。また、中世以降の板校倉の校木についても、木取りについてのデータを蓄積した。これまで、時代毎のテーマに基づいて調査をおこなってきたが、今後は時代を通じた視点を設定することで研究を深化させられるという道筋がつけられた。

◆復元設計を方法とする東アジア古代建築の空間及び造形原理の解明

代表者・清水 重敦　若手研究（B）継続

本研究は、発掘遺構の復元設計を古代建築理解のための方法と位置付け、その設計プロセスを通じて古代建築の空間・造形原理に迫ろうとするものである。今年度は、縄文、弥生、古墳時代における建築技術の再検討と、奈良時代建築の重要発掘遺構の構造的観点からの解釈をおこなった。前者については、九州北部における発掘調査に基づく建物復元をおこなっている事例を現地調査し、重要出土部材の検証及び復元案の批判的検証をおこなった。後者については、飛鳥から奈良時代の建築遺跡、特に重層建築と門の建築につき、技術的観点からの考察を進めている。

◆中世日本と中国における木造建築の架構システムに関する比較研究

代表者・鈴木 智大　若手研究（B）継続

本研究は、木造建築の架構システムに着目し、日本と中国の比較をおこなうことで、両国、更には東アジアにおける木造建築の技術およびその設計論理を解明しようとするものである。４ケ年計画の３年目となる2011年度は、震災にともなう年度当

初の予算執行計画立案の困難さから、中国における現地調査を実施することができなかった。そのため中国の古代建築に関しては、文献の収集および、図面の整理を中心におこない、現地調査は日本の中世遺構について、重点的におこなった。なお2012年度からは、本研究課題で得た問題意識に基づき、「中世日本と東アジアにおける木造建築の架構システムに関する比較研究」（基盤研究（C））として研究を発展的に継続する。

◆土質遺構保存のための基礎的研究―動水勾配を利用した塩類析出抑制法の開発―

代表者・脇谷 草一郎　若手研究（B）継続

本研究は、遺構表面への水分供給によって、１）遺構土壌の形状安定化、および２）可溶性塩類のリーチングをおこない、土質遺構の安定な露出展示保存法の開発を目指すものである。

本年度は熱・水分・溶質の移動について、引き続き土壌カラム実験をおこなうとともに、熱・水分同時移動に関する数値解析を土質遺構および装飾古墳墳丘において実践した。次年度は熱・水分・溶質の同時移動に関する数値解析から、上記１）、２）の目的に対して最適な動水勾配を与える諸条件を検討し、これを土壌カラム実験によって再現する予定である。

◆東アジアにおけるインド・パシフィックビーズの材質と流通に関する科学的研究

代表者・田村 朋美　若手研究（B）継続

本研究では日本で出土するガラス小玉について非破壊元素測定をおこない、材質と着色材の関係からその歴史的変遷についてあきらかにすることを目的とする。2011年度は弥生～古墳時代のガラス製遺物の材質・構造調査を実施した結果、京都府長岡京市宇津久志１号墳（古墳時代中期）出土遺物から多数のインド・パシフィックビーズとともにローマ系の金層ガラス玉を検出した。当時の交易関係を解明する手掛かりとなる重要な成果である。

◆令前木簡と古代文書の機能論的検討による日本における古代文書行政成立史の研究

代表者・山本 崇　若手研究（B）継続

本申請研究は、研究がまだ途についたばかりの令前の文書木簡を主たる対象とし、日本における文書行政の成立過程を明らかにせんとするものである。2011年度は、主に大和及び都城遺跡出土木簡を対象とし、その成果の一部は『藤原宮木簡三』（解説）ほかの論考として公表した。また、『日本書紀』にみえる「オシテフミ」をてがかりとして、令前における地方への王命送達システムについて検討した。

◆九州における更新世末の移動・居住システムの変遷過程に関する研究

代表者・芝 康次郎　若手研究（B）継続

本研究は、九州の後期旧石器時代から縄文時代移行期の移動・居住システムについて、石器技術、石材消費の観点から究明するものである。今年度は後期旧石器時代後半期の石器群資料を集成し検討した。その結果、剥片尖頭器石器群と角錐状石器群では遺跡数、立地、構造が変化していることをつかむことができた。なお、その後に展開するナイフ形石器群終末期の状況については『九州における細石刃石器群の研究』（六一書房）において公表した。

◆奈良時代の中央と地方における建築技術の研究

代表者・海野 聡　若手研究（B）継続

本研究は、発掘資料・文献資料・現存建築の３者を複合的に検討し、奈良時代の建築技術の解明を試みるものである。2011年度は、発掘遺構・現存建築の資料収集をおこない、地方官衙に関するシンポジウムを通して、地方公共団体の関係者と意見交換をおこなった。また、日本建築学会の学術講演会において四面廂に関する考察を発表し、双堂の形状、越前国桑原庄の建物の構造、裳階の構法の変遷、倉庫建築の設計寸法等の成果を日本建築学会、建築史学会、佛教藝術等の審査付論文を中心に公開した。

◆近世建造物の年代測定を目指したツガ年輪パターンの拡充と産地推定

代表者・藤井 裕之　若手研究（B）継続

ツガ（栂）に関する暦年標準パターンの実用化と、それに基づく木材の産地推定手法の開発を目的とした継続課題である。2011年度も西日本の物件を対象に調査をおこない、奈良県橿原市称念寺や高知市高知城において、まとまった数の年輪計測用画像を収集したほか、宮崎県椎葉村においても、生立木のコアサンプリング（九州大学宮崎演習林）や円盤標本等の収集を集中的に実施できた。これらの年輪計測作業がひととおり完了するのは来年度初頭の見込みで、その後既存パターンの補強や、産地推定手法の検討にすすむ予定である。

◆絹文化財の簡易的な劣化指標の作成

代表者・赤田 昌倫　若手研究（B）転入

長年月埋蔵環境にあった絹は非常に劣化しているが、その劣化の度合いについては試料の量的な制約から物性強度測定が困難であるため観察によるものがほとんどである。そこで、絹を赤外分光分析（ATR）で分析し、特定成分のピーク強度変化に関する性質を利用した劣化度評価方法を検証した。

絹のAmide基のピーク強度またはピーク面積と結晶化度のパラメータについてプロットし、相関性について検証した。その結果、経時変化した実験試料のプロット値の平均は劣化にともなって上昇し、相関性が存在することがわかった。

◆木彫仏像を中心とした日本彫刻史研究における年代決定法の調査・研究

代表者・児島 大輔　若手研究（B）新規

本研究は、木彫仏像の年輪年代調査結果を従前の美術史的研究手法によって得られた年代観と対照することで彫刻史研究における制作年代推定の精度を高め、年輪年代調査によって得られる情報を活用して造像過程の様相や木材利用のあり方を究明することを目的とするほか、カヤに対する年輪年代法の適用の可否を検討し、カヤ材が多用される初期一木彫像の制作年代を推定するための基盤を形成することを目的としている。研究初年度の2011年度は、実際に木彫像の年輪年代測定調査をおこなっているほか、カヤ材に対する基礎的研究を始めた。

◆GT-Map等時空間解析システムを利用した木簡等出土文字資料分析の基礎的研究

代表者・馬場 基　若手研究（B）新規

本研究は、「木簡の構文・文字表記パターンの解析・抽出研究（若手研究（B）。研究代表者・馬場基）」をふまえ、木簡の時空間情報の分析からの歴史情報を獲得する手法の開発を目的とする。2011年度は、主として木簡記載地名に数値を付与する作業をおこなった。

なお、「木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築（基盤研究（S）。研究代表者・渡辺晃宏）」・「ボーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究（基盤研究（A）。研究代表者・山家浩樹）」と、データ・研究成果等を共有しながら研究を進めている。

◆三次元計測による飛鳥時代の石工技術の復元的研究

代表者・廣瀬 覚　若手研究（B）新規

本研究は、三次元計測の手法を用いて、飛鳥地域を中心に石材加工にかんするデータを収集し、飛鳥時代の石工技術を詳細か

つ体系的に復元することを目的とする。本年度は、高松塚・キトラ古墳石槨の加工痕跡の整理・分類をおこなった。また、香芝市平野塚穴山古墳の石槨において、石材加工痕跡の観察と三次元レーザー測量調査を実施し、高松塚古墳との石工技術や使用尺度の共通性を確認した。その成果の一部を第108回奈文研公開講演会、および『奈文研紀要2012』において公表した。

◆古代における骨角製品の動物考古学的研究

代表者・丸山 真史　若手研究（B）新規

本研究は、古代から近世の骨角製品について、生産体制や生産者（職人）の社会的立場の変遷をあきらかにすることを目的としたものである。従来の骨角製品（骨角器）の研究は先史を主流としており、古代以降について注目される機会が少なかった。そこで、本研究の初年は、畿内における骨角製品の集成をおこない、器種や素材の時期的な変遷をあきらかにするための基礎資料を作成した。また、現生の鹿角を素材に、鋸やヤスリを用いて、切断や研磨等の加工を施し、その加工痕について観察した。

◆目録学の構築と古典学の再生―天皇家公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明

代表者・東京大学史料編纂所教授　田島公（渡辺 晃宏）　学術創成研究費　継続

2011年５月、「木簡人名データベース」の奈文研HPにおける公開を開始した。また、引き続き人名データ抽出のための木簡データベースCSVの改訂作業、データの増補・搭載作業、及び別に公開した画像データベース「墨書土器字典」に基づく墨書土器人名データの抽出をおこなった。

データの増補・搭載は約3,000件についておこない、都城のほか、地方の主要な遺跡の木簡の人名をアップすることができた。

当該研究費での作業は2011年度で終了するが、今後、更に増補・修訂を続け、来るべき『日本古代人名辞典』の増補・修訂に備える予定である。

◆考古学と人類学のコラボレーションによる縄文社会の総合的研究

代表者・島根大学法文学部准教授　山田康弘（山﨑 健）　基盤研究（B）継続

本研究は、考古学者と人類学者が共同して発掘調査をおこない、縄文社会モデルを構築するとともに、考古学と人類学の「今後あるべき研究協力体制」を提示することを目的としている。

2010年度に引き続いて、愛知県保美貝塚を調査して、盤上集骨葬例や単独・単葬例の発掘をおこなった。そして、土壌選別作業を積極的におこない、現場では見落とされてしまう微細な遺物の回収に努めた。

◆「日本霊異記」の文献・書誌及び歴史地理的検討による古代社会像の再構築

代表者・立命館大学文学部教授　本郷 真紹（山本 崇）　基盤研究（C）継続

本研究は、九世紀初頭に成立した日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』の全ての説話を対象に、文献学・書誌学的な知見をふまえた分析と、現地調査に基づく歴史地理学・考古学的考察をおこなうことにより、古代社会の実態と構造を新たな観点から復元・再構築することを目的としている。最終年度にあたる2011年度は、上巻注釈書の編集作業をすすめ入稿原稿を作成したほか、中巻説話の検討、紀伊の古代寺院等の現地調査をおこなった。

◆考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎調査

代表者・鹿児島大学法文学部教授　渡辺芳郎（金田 明大）　基盤研究（C）継続

最終年度を迎え、成果の整理をおこない、探査成果を報告するとともに、発掘調査と連携して成果をあげた南京皿山窯の発掘調査と探査成果との比較をおこない、その有効性を検討した。今後、窯構造等の概略をあきらかにしつつ、遺跡の改変を極力避けた形での調査を探査と連携させることで可能になることを示すことができた。これらの成果を報告書として刊行した。また、鹿児島大学の教職員、学生に向けたワークショップを開催した。

◆平安時代における須恵器の生産と供給―陶邑窯を中心に―

代表者・木村 理恵　（財）髙梨学術奨励基金　継続

本研究の目的は、古墳時代から続く一大窯跡群である陶邑窯跡群の解体過程をあきらかにし、その事象が周辺の窯跡に与えた影響を解明することを目的とする。2011年度は、陶邑窯跡群の最終段階の窯であるTK230-Ⅰ号窯出土須恵器の供給先をあきらかにするため、同時期の消費遺跡出土の須恵器壺・甕類に注目し、陶邑窯産須恵器の同定作業をおこなった。その結果、壺・甕類は平安京周辺へも供給するが、それ以外は周辺地域への供給を中心とする、二相供給のありようがあきらかになった。平安時代に入ると衰退の一途をたどるとされてきた陶邑窯であるが、都城域へも盛んに供給していた様相がわかりつつある。

◆ミクロネシア連邦ナン・マドール遺跡の保護に資する人材育成ワークショップ

代表者・石村 智　国際交流基金 文化協力（助成）プログラム　新規

ミクロネシア連邦ポンペイ州に所在する巨石文化の遺構ナン・マドール遺跡の保存とそのユネスコ世界遺産登録に向けた国際協力の一環として、現地で人材育成ワークショップを開催した（文化遺産国際協力コンソーシアム・ユネスコ日本信託基金との共催）。ワークショップには日本側から考古学・環境学・観光学の専門家がそれぞれ参加し、遺跡保護に関する講義をおこなった。現地側からは政府当局者および地域住民代表らが参加し、持続可能な遺跡保護に向けてのディスカッションがおこなわれた。

伝統的飲料（サカウ）を用いたセレモニー

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2011年７月１～２日に第２回（通算23回）の文化財写真技術研究会の総会と研究集会を奈良国立博物館　東新館講堂において開催した。

１日：総会・研究会Ⅰ　写真の本質を改めて考える

講演「写真回帰」（宮田公佳氏；国立歴史民俗博物館）

２日：研究会Ⅱ　デジタル文化財写真の本格運用

発表「文化財写真を取り巻く環境」（富樫孝志氏；静岡県教育委員会、景山和也氏；金沢市埋蔵文化財センター、（財）広島市未来都市創造財団；椙木敬太氏、伊藤雅和氏；（株）アーキジオ、岡田愛氏；奈良文化財研究所、佐々木香輔氏；奈良国立博物館）

「パネルディスカッション」（コーディネーター　杉浦秀昭氏；名古屋市博物館、発表者）

１日目は、写真の位置付けを改めて見つめ直す内容で「写真回帰」と題する講演をおこなった。

２日目は、様々な組織形態の担当者にデジタル文化財写真の本格運用について、現状と課題を報告して頂き、最後にパネル

ディスカッションをおこなった。

両日を通じて、写真のデジタル化が写真のあり方を根源から問い直す契機となっていること。そして、写真を業務の一環として使用している文化財業界においては、変革と混迷の両面をもたらしている実態が浮かびあがった。（栗山 雅夫）

◆日本遺跡学会

2011年11月26・27日に、文化財庭園保存技術者協議会、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と共同で、「発掘庭園―空間と技術―」をテーマに、2011年度大会を福井県立歴史博物館講堂にて開催した。

初日は、尼﨑博正氏（京都造形芸術大学教授）の特別講演「日本庭園の可能性」と、藤原武二氏（福井県文化財保護審議会会長）「一乗谷朝倉氏遺跡庭園と養浩館（旧御泉水屋敷）庭園」、片石高幸氏（文化財庭園保存技術者協議会）「文化財庭園保存技術者協議会の活動について」の２つの講演の後、亀山章氏（文化財指定庭園保護協議会会長）を座長に「庭園の発掘調査と文化財庭園保存技術」をテーマにミニ討論をおこなった。

２日目は、及川司氏（平泉文化遺産センター）「平泉の庭園」、板橋稔氏（足利市教育委員会）「樺崎寺跡庭園」、三好清超氏（飛騨市教育委員会）「江馬氏下館跡庭園の発掘調査成果について」、増野晋次氏（山口市教育委員会）「史跡大内氏館跡庭園について」、吉村龍二氏（文化財庭園保存技術者協議会）「醍醐寺三宝院庭園保存修理事業について」の５本の事例報告の後、発掘庭園全般について、小野健吉（奈良文化財研究所）座長の下、藤原氏、片石氏、事例報告者で討論をおこなった。（青木 達司）

◆木簡学会研究集会

2011年12月３・４日、第33回木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した（参加者169名）。

３日は総会後、研究集会があり、髙村正幸氏の研究報告「中国古代簡牘分類試論」のあと、馬場基氏のコメント「日本木簡の分析視角―髙村報告を受けて」を受けて、古代木簡の分類をめぐって、日中比較の観点をまじえて討議した。

４日は、まず山本崇氏「2011年全国出土の木簡」で全国の木簡出土状況を概観した。次に筒井崇史氏（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）「木津川市上狛北遺跡の発掘調査と出土木簡」により、復元恭仁京域で最初の木簡が出土した上狛北遺跡の調査成果について、続いて渡辺晃宏「平城京左京三条一坊一坪の発掘調査と出土木簡」により、六角形の特異な構造の井戸から木簡が出土し、奈良時代前半の工房遺構が見つかった朱雀門前の宅地の発掘調査成果について、それぞれ紹介があった。

なお、会誌『木簡研究』第33号を編集・刊行した（編集担当：渡辺晃宏）。

（渡辺 晃宏）

◆古代官衙・集落研究会（第15回）

2011年12月９・10日に、「四面廂建物を考える」をテーマに研究集会を開催した。

研究報告は、箱崎和久「身舎外周柱列の解釈と上部構造」、家原圭太「都城と周辺地域の四面廂建物」、小澤太郎「西海道における四面廂建物の様相」、江口桂「東日本における古代四面廂建物の構造と特質」、有富純也「平安時代の儀式・建築からみた母屋と廂」、池田敏宏「多面廂建物跡・雑考―古代仏教系遺物共時傾向の検討を中心に―」、青木敬「検出遺構における四面廂建物」の７本である。総合討議では石橋茂登氏の司会により、四面廂建物の遺構認定や性格、機能、歴史的展開等、多岐にわたる論点について活発な議論が交わされた。

参加者は地方公共団体・大学関係者等131名で、アンケートでは97％が有意義であったとの回答が得られた。また、この研究集会の研究報告を2012年度に刊行する予定である。（小田 裕樹）

◆条里制・古代都市研究会

2012年３月３日・４日の両日、第28回条里制・古代都市研究会大会が、「古代の災害を考える―地震・津波・噴火―」をテーマとして奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂でおこなわれた。延べ参加者数173名。１日目は、都司嘉宣氏により「歴史地震と津波の既説に異議あり―関東地方にも及んだ貞観地震津波（869）と街区名を「島」と誤解された「瓜生島伝説」・慶長豊後地震（1596）―」と題した基調報告の後、渡辺徹也・鎌田洋明・鷹野光行「遺跡にみる貞観16年の開聞岳噴火災害について」、柳澤和明「災害と向き合い歴史に学ぶ―貞観11年陸奥国巨大地震・津波とその復興―」、今津勝紀「仁和三年の南海地震と平安京社会」の３本の報告がおこなわれ、その後討論がおこなわれた。２日目は、調査レポートと題し、京都府上狛北遺跡、長岡宮西方官衙地区・北方官衙地区、平安京右京三条一坊六町、岐阜県大野町の条里調査、奈良県下ツ道（八条北遺跡）の５本が報告され、その後各報告にかんする活発な討論がおこなわれた。（青木 敬）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮跡の整備

遷都1300年祭ののち、平静をとり戻した平城宮跡だが、次へのステップに向けて各種の事業が展開しており、それらへの、調査・研究・協力をおこなっている。

まず、平城宮跡内では、国土交通省あるいは文化庁により、第一次大極殿院地区の整備用ゲートや照明・防災設備の設置、また、これらにともなう配管工事等がたびたびおこなわれており、地下遺構への影響がないかどうかを確認するため、工事ごとに立会をおこなった。

つづいて、遺構展示館で露出展示している発掘遺構に、主として地下水と考えられる水の湧出によって蘚苔類が発生する問題について、対策を考える文化庁の事業に協力した。2012年２月10日には、「平城宮跡遺構展示館の露出展示改善に関する検討委員会」が開催され、歴史学・建築環境・土壌・土木等の有識者とともに、委員あるいはオブザーバーとして参加した。

いっぽう、国土交通省が朱雀門の南東に計画している平城宮跡展示館について、展示のテーマや具体的な展示物等、基本設計の策定作業に協力した。国土交通省をはじめ、展示業者等との打ち合わせを重ね、また所内の展示委員による検討を不定期におこなっている。

加えて、国土交通省が計画している平城宮跡の整備について、発掘資料の提供等の協力をおこなった。第一次大極殿院の復原整備関連では、平成22年度から奈良時代の大極殿院を復原する作業をおこなっているが、平成23年度には計17回の復原検討会を開催し、あわせて国内外の類例調査をおこなった。（箱崎 和久）

第一次大極殿院復原類例調査（ベトナム・フエ王宮）

●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニング等の作業がおこなわれている。壁画の保存修復においては、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこない、その材質、劣化状態および劣化原因に関する情報を得ることが重要である。

本年度は、劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、東壁１および３、床石１、２および３、天井石３の計６石に対して蛍光X線元素分析法により鉛の分布及び顔料の調査をおこなった。また、可視分光光度計と近赤外分光光度計を壁画の彩色に関する分光学的調査に適用するため、機器の最適測定条件を検討するとともに、種々の顔料試料の標準スペクトルの取得をおこなった。更に、今後の経年変化の基礎データを集積するために、デジタルアーカイブスキャナを使用して、東壁、西壁、北壁および天井の可視光並びに赤外光による高精細画像を取得するとともに、紫外線を用いた画像取得の基礎研究として、照射紫外線の波長の選定、照射紫外線量の測定、画像取得のための条件設定に取り組んだ。

漆喰の分析調査では、電子顕微鏡観察を継続するとともに、テラヘルツ分光イメージング法による漆喰の状態調査のための基礎研究、漆喰表面へのカルサイト殻形成メカニズムに関する基礎研究をおこなった。

石室石材の修理としては、安定台および亀裂部側面サポートの製作（天井石４）をおこなった。

以上の他、高松塚古墳墳丘部の発掘時におこなった版築層の土層転写資料（はぎ取り資料）から、各層の資料を採取し粒度分布調査をおこなった。　（髙妻 洋成）

壁画の材料調査

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係の事業では、発掘調査により出土した遺物の分析調査および石室内の考古学的調査を実施した。

分析調査では、漆製品の一部について、再処理の是非を論ずるに必要なデータの収集に努めた。調査としては、漆成分の有無（赤色漆部）と樹脂・漆の高周波プラズマ発光分光分析および原子吸光度分析である。

考古学的調査では、壁画を描いた面の漆喰取り外し作業が完了したことを受け、漆喰取り外し後の石材表面と石室床面に残存する漆喰上の精査、および石室構造に関する調査を実施した。

床面の精査では、東西両端に幅約18cm、北端に幅約20㎝の漆喰の残存が良好な部分があり、その内側には他よりも白色を呈する幅約3cmの漆喰が帯状にのびる状況を確認した。これらは棺台の痕跡と考えられ、北辺、東辺、西辺の３辺で確認できた。痕跡の東西幅は68㎝、南北長は西辺で137.5㎝が残存する。キトラ古墳における棺台の痕跡は、2004年に撮影したフォトマップを通してその存在を推測してきたが、今回の精査によりそれとほぼ同様の位置で痕跡が明瞭に残存する状況が明らかになった。

また、石材表面には朱線を計20本確認できた。これまで判明していたものは、床面１本、天井５本の計６本であり、新たに14本の朱線を確認したことになる。朱線は主に石材加工の際の基準線と考えられる。朱線に用いた顔料調査のため、蛍光X線分析もあわせて実施した。

石室構造については、石室の入口部を閉塞する南壁石を他の壁石よりも高さが2cmほど低く加工していることが判明した。これは石室の開閉を容易にするための意図的な工夫と考えられる。更に、石材表面の加工痕跡に関して、拓本による記録作業をおこない、石室内外の形状を記録するために、3D計測機により高精細データを取得した。

（玉田 芳英）

石室内での実測作業

発掘調査現地説明会・見学会

◆平成23年6月19日（日）
平城第481次（平城宮東院地区）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
遺構研究室　鈴木 智大
参加者650人　　調査面積816㎡

◆平成23年9月17日（土）
平城第483次（興福寺北円堂）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（平城地区）
遺構研究室　大林 潤
参加者800人　　調査面積 676㎡

◆平成23年11月5日（土）
飛鳥藤原第169次（藤原宮朝堂院朝廷）
発掘現場現地説明会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
考古第一研究室　廣瀬 覚
参加者620人　　調査面積1,350㎡

◆平成23年11月19日（土）
平城第486次（平城京左京三条一坊一坪）
発掘現場現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第二研究室　神野 恵
参加者200人　　調査面積 1,668㎡

◆平成24年3月4日（日）
飛鳥藤原第171次（甘樫丘東麓）
発掘現場現地見学会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
参加者1,005人　　調査面積 880㎡

◆平成24年3月10日（土）
平城第488次（平城京左京三条一坊一坪）
発掘現場現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第一研究室　諫早 直人
参加者850人　　調査面積 1,584㎡

発掘調査現地説明会の様子

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

埋蔵文化財の保護・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2011年度は、専門研修13課程を実施した(2011年度文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数97日、研修生総数136名であった。

企画調整部および各研究部では、要請に従って地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2011年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物依存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻-文化・地域環境論講座の文化遺産学分野の客員教員として大河内隆之（年輪年代学論）・小澤毅（遺跡調査法論）・小野健吉（庭園文化論）・髙妻洋成（保存科学論）・清水重敦（文化的景観論）・松井章（環境考古学論）ら6名がそれぞれの講義を担当し、全員が文化遺産学演習や共生文明学特別講義を担当した。

授業では、各教員の専門である年輪年代学、都城・寺院を対象とした歴史考古学、庭園史学、保存科学、文化的景観学、環境考古学等の講義・演習・実習等をおこない、また、文化遺産学を専攻する院生らは、授業以外も主として奈文研で研究・実習をおこない、必要に応じて各教員が指導にあたった。2011年度に在籍した院生は修士課程6名、博士後期課程6名（休学を含む）であった。

奈良女子大学(大学院)との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教授として、深澤芳樹（歴史考古学特論）・小池伸彦（文化財学の諸問題）・渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡などの遺跡の発掘調査、坩堝や羽口、金属製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践した。

2011年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

（青森）	三内丸山遺跡　縄文遺跡群
（岩手）	御所野遺跡　志波城跡　平泉遺跡群
（宮城）	多賀城跡
（秋田）	胡桃館遺跡
（福島）	宮畑遺跡
（栃木）	上神主・茂原官衙遺跡　下野国分寺跡
（新潟）	吹上・釜蓋遺跡
（富山）	加賀藩主前田家墓所（前田利長墓所）
（福井）	朝倉氏遺跡
（長野）	柳沢遺跡
（岐阜）	郡上八幡北町伝統的建造物群　正家廃寺跡
（静岡）	新居関跡　遠江国分寺跡
（愛知）	東ノ宮古墳　名古屋城跡　本光寺
（三重）	伊勢国分寺跡　北畠氏館跡庭園　久留倍官衙遺跡　斎宮跡
（滋賀）	大津市伝統的建造物群　慶雲館庭園
（京都）	元離宮二条城　恭仁宮跡
（大阪）	百済寺跡　新堂廃寺等
（兵庫）	法隆寺領播磨国鵤荘史跡　和田岬砲台　姫路城跡　池田古墳　赤穂城跡　五斗長垣内遺跡　兵庫県近代和風建築
（奈良）	旧大乗院庭園　平城京左京三条二坊宮跡庭園　中宮寺跡　巣山古墳　橿原市伝統的建造物群　大安寺旧境内　薬師寺東塔　唐古・鍵遺跡　五條市伝統的建造物群　菖蒲池古墳　薬師寺境内　東大寺境内　尼寺廃寺跡
（和歌山）	紀伊山地の霊場と参詣道　闘鶏神社　根来寺境内
（鳥取）	栃本廃寺跡　青谷上寺地遺跡　三徳山行者道
（島根）	旧堀氏庭園　出雲大社境内遺跡
（岡山）	第二次山陽遺跡　備中松山城跡　造山古墳
（広島）	安芸国分寺跡　二子塚古墳
（徳島）	阿波国分尼寺跡　勝端城館跡　徳島県近代和風建築
（香川）	屋嶋城跡　快天山古墳　丸亀城跡
（愛媛）	久米官衙遺跡群
（福岡）	大宰府史跡　鴻臚館跡　三雲・井原遺跡
（長崎）	原の辻遺跡　鷹島海底遺跡　端島炭坑
（大分）	大分元町石仏　法鏡寺廃寺跡　長者屋敷官衙遺跡　岡藩主中川家墓所　的山荘附日本庭園
（宮崎）	日向国府跡　飫肥城下町庭園群　蓮ケ池横穴群

2011年度　文化財担当者研修課程一覧

区分	課　　程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	応募者数	受講者数
専門研修	建築遺構調査課程	6月13日～6月17日	12名	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	建築遺構の調査に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺構研究室	5日	9名	9名
	建造物保存活用基礎課程	6月20日～6月24日	16名	〃	文化財建造物の保護行政をおこなうための、文化財建造物に関する基礎、および文化財建造物の保存・修復・活用に関する基礎の習得を目指す研修	建造物研究室	5日	21名	20名
	石器・石製品調査課程	9月12日～9月16日	10名	〃	旧石器時代から弥生時代の石器を中心として、石材鑑定・観察・分類・編年・製作技法等の遺物調査方法ならびに石器・石製品の発掘調査方法に関する専門的知識と技術の習得を目指す研修	考古第一研究室	5日	14名	14名
	自然科学的年代測定法課程	9月26日～9月30日	12名	〃	年輪年代法とC14年代測定法を中心とする、自然科学的手法による年代測定に関する専門的知識と技術の研修	年代学研究室	5日	3名	3名
	保存科学Ⅰ（金属製遺物）課程	10月4日～10月13日	10名	〃	金属製遺物の保存処理を外注するために必要となる基礎的な知識を、講義と実習を通して習得することを目指す研修	保存修復科学研究室	10日	7名	7名
	保存科学Ⅱ（木製遺物）課程	10月13日～10月21日	10名	〃	木製遺物の保存処理を外注するために必要となる基礎的な知識を、講義と実習を通して習得することを目指す研修	保存修復科学研究室	9日	6名	6名
	遺跡測量課程	10月26日～11月2日	10名	〃	遺跡の測量および外注に必要な専門的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	8日	4名	4名
	遺跡情報記録調査課程	11月14日～11月18日	16名	〃	遺跡・遺物の正確な記録とその保存手法として、GISやデータベースの利用法に関する基礎的な知識の取得を目指す研修	文化財情報研究室	5日	8名	8名
	文化財写真課程	11月28日～12月8日	10名	〃	文化財調査における写真業務全般に関して、写真記録の重要性、撮影・保管活用についての基礎知識を講義、実習を通じて自家撮影処理/委託撮影処理・フィルム撮影/デジタル撮影にかかわらず高品質な写真資料を取得することを目的とする研修	写真室	11日	12名	12名
	報告書作成課程	12月8日～12月16日	16名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	9日	13名	11名
	遺跡等環境整備課程	1月10日～1月20日	12名	〃	地域における遺跡等の保存管理・公開活用に関する計画立案の基礎的知識、事例紹介・見学のほか、基本構想立案の演習をおこなう研修	遺跡整備研究室	11日	23名	13名
	保存科学Ⅲ（応急処置）課程	2月6日～2月10日	10名	〃	発掘調査において出土した脆弱遺物の取り上げ、保存処理までの一時保管法等の遺物の取り扱いに関する応急処置について、講義と実習を通して習得する研修	保存修復科学研究室	5日	21名	20名
	地質環境調査課程	2月14日～2月22日	16名	〃	環境考古学の基幹を構成する地質環境分野の最新の研究法と、その成果についての専門的知識と技術の研修	環境考古学研究室	9日	9名	9名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「星々と日月の考古学」

2011年4月16日～5月29日

実物を公開することが現在も困難な状況にあるキトラ古墳天井天文図。そこで、飛鳥資料館が所蔵する天井天文図の原寸大のフォトマップ写真を展示した。そして、キトラ古墳や高松塚古墳の天井天文図等を手がかりに、星宿等の星々や太陽と月について、古代の人々がいかに観測し、それらについてどのように感じていたのかを考察するとともに、人工衛星を使った“衛星考古学（サテライトアーケオロジー）”、“宇宙考古学（スペースアーケオロジー）”の最前線を紹介した。５月14日に相馬秀廣奈良女子大学教授、飛鳥資料館学芸室長加藤による講演会を開催した。

◆夏期企画展「鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―」

2011年8月2日～9月4日

東アジアにおける鋳造技術の歴史的変遷を紹介し、その中での飛鳥・奈良時代の鋳造技術の位置づけを示した。また、奈文研がおこなってきた鋳造遺跡の調査や鋳造技術に関する研究等を紹介した。なお、展示した堺市太井遺跡、橿原市内膳北八木遺跡の出土品に関しては、所蔵機関の了解のもと、理化学的な分析をおこない、その成果を『飛鳥資料館研究図録14奈良県橿原市内膳北八木遺跡・大阪府堺市太井遺跡出土の冶金関連遺物の調査』として公刊した。

◆秋期特別展「飛鳥遺珍―のこされた至宝たち―」

2011年10月14日～11月27日

今日、日本各地の博物館や研究所に大切に保管されている、飛鳥に由来する多くの文化財。そうした明日香村外に保管され、普段はまとめてみることはできない飛鳥の至宝ともいうべき文化財の帰郷展。法隆寺献納宝物の銅造阿弥陀如来及両脇侍像、同じく如来立像（ともに東京国立博物館蔵）、明日香村古宮遺跡出土の金銅四鐶壺（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）等の展示が話題を呼んだ。11月６日に木下正史東京学芸大学名誉教授、相原嘉之明日香村教育委員会文化財課調整員の講演会を開催した。また、金銅四鐶壺については、奈文研と宮内庁が共同して理化学分析、実測をおこない、成果を『飛鳥資料館研究図録15宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　金銅四鐶壺の調査研究』として刊行した。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2011」

2012年1月20日～2月26日

前年度の飛鳥地域での考古学的調査の成果を紹介する冬期恒例の企画展。今年度は、明日香村の牽牛子塚古墳、越塚御門古墳等のほか、近年、調査・研究成果がまとまった橿原市植山古墳、明日香村坂田寺鎮壇具に関する展示もおこなった。また、奥飛鳥の文化的景観が国の重要文化的景観に選定されたことから、それに関わる展示、エクスカーション、写真コンテスト等もおこなったが、これは、今後進めるべき飛鳥資料館の展示や行事に関する試金石ともなった。

2011年度　入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は61頁	42,479人
平城宮跡資料館（無料）	132,295人
合　　計	174,774人

平城宮跡資料館の展示

◆新規常設展「考古科学コーナー」

2011年7月30日～

新規常設展示として、新たに増設したコーナー。奈文研の埋蔵文化財センターがおこなっている「保存科学」「環境考古学」「年輪年代学」「測量と探査」に関する調査・研究について、わかりやすく解説した。

科学的な内容を楽しみながら理解できるよう体験型の展示を取り入れ、親子連れの集客をはかった。

◆秋期企画展「地下の正倉院展―コトバと木簡」

2011年10月18日～11月27日

年に一度の木簡の特別公開展示。今年度は、木簡に書かれた「文字」に焦点をあて、万葉びとが中国の文字「漢字」を使いこなそうとした努力と工夫のあとをたどった。

木簡は三期に分け、合計71点を展示した。会期中の入館者は、20,120人で、10月23日、11月６・20日には都城発掘調査部史料研究室の研究員によるギャラリートークを実施した。

◆春期企画展「発掘速報展　平城2011／文化財レスキュー展」

2012年3月10日～5月27日

奈文研が2011年に発掘した平城宮・京内の３遺跡を中心に、調査の過程・成果を公開する企画展。会場

の床に、各遺跡の遺構平面図や検出した井戸の実寸大俯瞰写真を展示する等、発掘現場の雰囲気・臨場感を再現した。

今年度は同時開催として文化財レスキュー展も開催し、奈文研が関わった被災地での救援活動の記録や水損資料の保存処理について紹介し、事業への理解と協力を呼びかけた。

会期中の入館者数は42,271人で、毎週金曜日には、発掘調査員や文化財レスキュー担当者によるギャラリートークを開催した。

文化財レスキュー展のようす

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2012年３月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は173名を数え、平均して一人当たり１ヶ月に２～３日のガイド活動をおこなっている。

2011年度における活動については、定点５ヵ所の解説を中心に、予約受付した来場者への宮跡内ツアーガイドを充実させた。

奈文研としては、平城宮跡を広く一般に理解しもらうために、その案内・解説を「平城宮跡解説ボランティア」を通じておこない、その連続する活動を可能にするために、研修機会等の提供等、積極的な支援をおこなった。

また、ボランティアガイドの活動を更に広報し、より多くの方に平城宮跡へお越し頂くようポスター、チラシ、機関誌も発行した。

平成23年「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数　307日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	計	
28,758人	31,780人	14,005人	28,722人	11,346人	9,881人	124,492人	4,045人

＊活動は、定点施設の休館日を除く毎日。但し、本年度は、近畿地方への台風接近が３回有り、余儀なく活動を休止した。

2012.3.31現在

奈文研概要掲載文書

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、本庁舎図書資料室は一般公開施設として位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌及び展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを実施している。

また、奈文研の刊行物についても、PDF化をおこない、インターネットを通じて公開している。

公開データベース一覧	2011年度アクセス件数
木簡データベース	47,933
木簡画像データベース【木簡字典】	28,611
木簡字典くずし字連携検索	66,382
墨書土器字典（2011年12月より）	1,791
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	2,279
軒瓦データベース	2,717
遺跡データベース	24,548
地方官衙関係遺跡データベース	3,260
古代寺院遺跡データベース	3,046
官衙関係遺跡整備データベース	1,830
遺跡の斜面保護データベース	1,644
発掘庭園データベース	2,166
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	1,717
OPAC所蔵図書データベース	45,362
報告書抄録データベース	11,778
薬師寺典籍文書データベース	1,700
大宮家文書データベース	969
学術情報リポジトリ	25,128

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所　学報

第１冊　仏師運慶の研究（1954）
第２冊　修学院離宮の復原的研究（1954）
第３冊　文化史論叢（1955）
第４冊　奈良時代僧房の研究（1957）
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告（1958）
第６冊　中世庭園文化史（1959）
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告（1959）
第８冊　文化財論叢Ⅰ（1960）
第９冊　川原寺発掘調査報告（1960）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1961）
第11冊　院の御所と御堂－院家建築の研究－（1962）
第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ（1966）
第18冊　小堀遠州の作事（1966）
第19冊　藤原氏の氏家とその院家（1968）
第20冊　名物裂の成立（1970）
第21冊　研究論集Ⅰ（1972）
第22冊　研究論集Ⅱ（1974）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ（1975）
第24冊　高山－町並調査報告－（1975）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ（1976）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1976）
第28冊　研究論集Ⅲ（1976）
第29冊　木曽奈良井－町並調査報告－（1976）
第30冊　五條－町並調査の記録－（1977）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1978）
第32冊　研究論集Ⅳ（1978）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1978）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ（1978）
第35冊　研究論集Ⅴ（1979）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1979）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1980）
第38冊　研究論集Ⅵ（1980）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ（1981）
第40冊　平城宮発掘調査報告Ⅺ（1982）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告Ⅻ（1985）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1985）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1986）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1987）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1989）
第47冊　研究論集Ⅷ（1989）
第48冊　年輪に歴史を読む
－日本における古年輪学の成立－（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1991）
第50冊　平城宮発掘調査報告書XIII（1991）
第51冊　平城宮発掘調査報告書XIV（1993）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1993）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1994）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告（1995）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ（1995）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1998）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）
第59冊　中世瓦の研究（2000）
第60冊　研究論集Ⅺ（1999）
第61冊　研究論集Ⅻ（2001）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2001）
第63冊　山田寺発掘調査報告（2002）
第64冊　研究論集XIII（2002）
第65冊　文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集（2002）
第66冊　研究論集XIV（2003）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告（2003）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告（2003）
第69冊　平城宮発掘調査報告XV（2003）
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI（2005）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告Ⅰ（2004）
第72冊　奈良山発掘調査報告（2005）
第73冊　タニ窯跡A6号窯発掘調査報告（2005）
第74冊　古代庭園研究Ⅰ（2006）
第75冊　研究論集XV（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告（2007）
第77冊　日韓文化財論集Ⅰ（2008）
第78冊　近世瓦の研究（2008）
第79冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究１

（2009）
第80冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究４（2009）
第81冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究２（2010）
第82冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究３（2010）
第83冊　研究論集16（2010）
第84冊　平城宮発掘調査報告XVII（2011）
第85冊　漢長安城桂宮（2011）
第86冊　研究論集17（2011）
第87冊　日韓文化財論集Ⅱ（2011）
第88冊　西トップ遺跡調査報告（2011）
第89冊　四万十川流域　文化的景観研究（2011）

奈良文化財研究所　史料

第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1955）
第２冊　西大寺叡尊伝記集成（1956）
第３冊　仁和寺史料　寺誌編Ⅰ（1964）
第４冊　俊乗坊重源史料集成（1965）
第５冊　平城宮木簡一　図版（1966）解説（1969）
第６冊　仁和寺史料　寺誌編２（1968）
第７冊　唐招提寺史料第一（1971）
第８冊　平城宮木簡二　図版・解説（1975）
第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1975）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1976）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1977）
第12冊　藤原宮木簡一　図版・解説（1978）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1978）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1978）
第15冊　東大寺文書目録第一巻（1979）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡三　図版・解説（1981）
第18冊　藤原宮木簡二　図版・解説（1981）
第19冊　東大寺文書目録第二巻（1981）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第三巻（1981）
第22冊　七大寺巡礼私記（1982）
第23冊　東大寺文書目録第四巻（1982）
第24冊　東大寺文書目録第五巻（1983）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1983）
第26冊　東大寺文書目録第六巻（1984）
第27冊　木器集成図録－近畿古代編－（1985）
第28冊　平城宮木簡四　図版・解説（1986）
第29冊　興福寺典籍文書目録第一巻（1986）
第30冊　山内清男考古資料１（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1992）
第34冊　山内清男考古資料４（1992）
第35冊　山内清男考古資料５（1992）
第36冊　木器集成図録－近畿原始編－（1993）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1993）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1995）
第41冊　平城京木簡一　図版・解説（1995）
第42冊　平城宮木簡五　図版・解説（1996）
第43冊　山内清男考古資料７（1996）
第44冊　興福寺典籍文書目録第二巻（1996）
第45冊　北浦定政関係資料（1997）
第46冊　山内清男考古資料８（1997）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1998）
第48冊　発掘庭園資料（1998）
第49冊　山内清男考古資料９（1998）
第50冊　山内清男考古資料10（1999）
第51冊　山内清男考古資料11（2000）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（2000）
第53冊　平城京木簡二　図版・解説（2001）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2002）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
第60冊　平城京条坊総合地図（2003）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2003）
第62冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉一（2003）
第63冊　平城宮木簡六　図版・解説（2004）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
第65冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉二（2004）
第66冊　山内清男考古資料14（2004）
第67冊　興福寺典籍文書目録第三巻（2004）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2004）
第69冊　平城京漆紙文書一（2005）
第70冊　山内清男考古資料15（2005）
第71冊　古代東アジアの金属製容器Ⅱ
朝鮮・日本編（2005）
第72冊　畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ
－西日本編－（2005）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2006）
第74冊　山内清男考古資料16（2006）

第75冊　平城京木簡三　図版・解説（2006）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2006）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2007）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　図版・解説（2007）
第80冊　平城京出土陶硯集成Ⅱ（2007）
第81冊　高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
第82冊　飛鳥藤原京木簡二　図版・解説（2009）
第83冊　興福寺典籍文書目録第四巻（2009）
第84冊　山内清男考古資料17（2009）
第85冊　平城宮木簡七　図版・解説（2010）
第86冊　キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
第87冊　明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
第88冊　藤原宮木簡三　図版・解説（2012）

奈良文化財研究所　研究報告

第１冊　文化的景観研究集会（第1回）報告書（2009）
第２冊　河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概報（2010）
第３冊　古代東アジアの造瓦技術（2010）
第４冊　古代官衙・集落研究会報告書
　　「官衙と門」報告編／資料編（2010）
第５冊　文化的景観研究集会（第2回）報告書（2010）
第６冊　古代官衙・集落研究会報告書
　　「官衙・集落と鉄」（2011）
第７冊　文化的景観研究集会（第３回）報告書（2011）
第８冊　鞏義白河窯の考古新発見（2012）

奈良文化財研究所　基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1974）
第２冊　瓦編２　解説（1975）
第３冊　瓦編３　解説（1976）
第４冊　瓦編４　解説（1977）
第５冊　瓦編５　解説（1977）
第６冊　瓦編６　解説（1979）
第７冊　瓦編７　解説（1980）
第８冊　瓦編８　解説（1981）
第９冊　瓦編９　解説（1984）

飛鳥資料館　図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金剛仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金剛仏　銘文編（1977）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文編（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）
第６冊　飛鳥時代の古墳－高松塚とその周辺－（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年－壁画保存の歩み－（1982）
第10冊　渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－（1984）
第13冊　藤原宮－半世紀にわたる調査と研究－（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形　飛鳥藤原の文様を追う（1995）
第28冊　蘇我三代（1995）
第29冊　斉明紀（1996）
第30冊　遺跡を測る（1997）
第31冊　それからの飛鳥（1998）
第32冊　UTAMAKURA（1998）
第33冊　幻のおおでら－百済大寺（1998）
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として（1999）
第35冊　あすかの石造物（2000）
第36冊　飛鳥池遺跡（2000）
第37冊　遺跡を探る（2001）
第38冊　‘あすか－以前’（2002）
第39冊　AOの記憶（2002）
第40冊　古年輪（2003）
第41冊　飛鳥の湯屋（2004）
第42冊　古代の梵鐘（2004）
第43冊　飛鳥の奥津城
　　－キトラ・カラト・マルコ・高松塚。（2005）
第44冊　東アジアの古代苑池（2005）
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち（2006）
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武（2007）
第47冊　奇偉荘厳　山田寺（2007）
第48冊　キトラ古墳壁画十二支－子・丑・寅－（2008）
第49冊　まぼろしの唐代精華
　　－黄冶唐三彩窯の考古新発見－（2008）
第50冊　キトラ古墳壁画四神－青龍白虎－（2009）
第51冊　北方騎馬民族のかがやき

－三燕文化の考古新発見－（2009）
第52冊　キトラ古墳壁画四神（2010）
第53冊　木簡黎明
－飛鳥に集ういにしえの文字たち－（2010）
第54冊　星々と日月の考古学（2011）
第55冊　飛鳥遺珍－のこされた至宝たち－（2011）

飛鳥資料館　カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道（1975）
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１－最近の出土品－（1975）
第３冊　飛鳥の仏像（1978）
第４冊　桜井の仏像（1979）
第５冊　高取の仏像（1980）
第６冊　橿原の仏像（1981）
第７冊　飛鳥の王陵（1982）
第８冊　大官大寺－飛鳥最大の寺－（1985）
第９冊　高松塚壁画の新研究（1992）
第10冊　飛鳥の一と－最近の調査から－（1994）
第11冊　山田寺（1996）
第12冊　山田寺東回廊再現（1997）
第13冊　飛鳥のイメージ（2001）
第14冊　古墳を飾る（2005）
第15冊　うずもれた古文書
－みやこの漆紙文書の世界－（2006）
第16冊　飛鳥の金工－海獣葡萄鏡の諸相－（2006）
第17冊　飛鳥の考古学2006（2007）
第18冊「とき」を撮す－発掘調査と写真－（2007）
第19冊　飛鳥の考古学2007（2008）
第20冊　飛鳥の考古学2008（2009）
第21冊　飛鳥の考古学2009（2010）
第22冊　小さな石器の大きな物語（2010）
第24冊　木簡黎明
－飛鳥に集ういにしえの文字たち－（2010）
第24冊　飛鳥の考古学2010（2011）
第25冊　鋳造技術の考古学
－東アジアにひろがる鋳物師のわざ－（2011）
第26冊　飛鳥の考古学2011（2012）

その他の刊行物（2011年度）

奈良文化財研究所紀要2011
奈文研ニュースNo.41
奈文研ニュースNo.42
奈文研ニュースNo.43
奈文研ニュースNo.44
埋蔵文化財ニュースNo.146
埋蔵文化財ニュースNo.147
埋蔵文化財ニュースNo.148
埋蔵文化財ニュースNo.149
平城宮発掘出土木簡概報（四十一）
古代はいま　よみがえる平城京
ボランティアだよりNo.15
ベトナムフォティック村集落調査報告書（英文）
ニューズレター４号（西トップ寺院）
ニューズレター５号（西トップ寺院）
国宝重要文化財建造物写真乾板目録Ⅴ
遼寧省朝暘地区隋唐墓の整理と研究
鎌倉時代の庭園－京と東国－
木奥家所蔵大工道具調査報告書
地域における遺跡の統合的マネジメント
平成22年度　遺跡整備・活用研究集会(第5回)報告書
東アジア金属工芸史の研究14
東アジア金属工芸史の研究15
大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開
第12回シンポジウム　８世紀の瓦づくり
被災文化財のレスキュー
保存化学の果たすべき役割と課題
重要文化財建造物現状変更説明　1953～1957
（本文・図版編）
四面廂建物を考える
第15回古代官衙・集落研究会研究報告資料
文化遺産を救済する
コトバと木簡
発掘速報展　平城2011／文化財レスキュー展
奈良文化財研究所（パンフレット）

人事異動（2011. 4. 1～2012. 3. 31）

●2011年4月1日付け

研究支援推進部総務課課長補佐（兼）総務係長　大西俊隆
研究支援推進部総務課課長補佐　重光一夫
研究支援推進部連携推進課課長補佐
（兼）経営戦略係長　村上加代子
研究支援推進部総務課専門職員（研修等担当）
桑原隆佳
研究支援推進部総務課財務係長　江川正
研究支援推進部研究支援課専門職員
〔都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）担当〕米野元則
研究支援推進部研究支援課宮跡等活用支援係長
宮本隆行
研究支援推進部総務課財務係主任　中野留美子
研究支援推進部連携推進課経営戦略係主任
高田幸恵
研究支援推進部総務課財務係　松岡広樹
研究支援推進部研究支援課宮跡等活用支援係　三本松俊徳
（兼）研究支援推進部総務課施設係
企画調整部写真室再雇用職員　井上直夫
文化遺産部建造物研究室長　林良彦
都城発掘調査部考古第三研究室長　清野孝之
都城発掘調査部主任研究員　渡辺丈彦
都城発掘調査部主任研究員　森川実
都城発掘調査部主任研究員　黒坂貴裕
企画調整部展示企画室研究員　中川あや
都城発掘調査部考古第一研究室研究員　諫早直人
都城発掘調査部考古第一研究室研究員　庄田慎矢
都城発掘調査部考古第二研究室研究員　青木敬
都城発掘調査部考古第三研究室研究員　石田由紀子
都城発掘調査部史料研究室研究員　山本祥隆
都城発掘調査部考古第三研究室アソシエイトフエロー
中川二美
都城発掘調査部考古第三研究室アソシエイトフエロー
橋本美佳
アジア太平洋無形文化遺産研究センター設置準備室
室長補佐　松本正典
京都大学総務部人事課専門員（制度主査）　廣中保彦
京都大学農学研究科等総務課専門員（フイールド担当）
清水尚
京都大学研究国際部産官学連携課専門員（産官学連携グループ）
永井あつ子
京都大学工学研究科経理事務センター（Cクラスター事務区会計掛）
大村尚江
文化庁文化財部参事官付主任文化財調査官（伝統的建造物群部門）
島田敏男
文化庁文化財部記念物課文部科学技官（埋蔵文化財部門）
国武貞克
文化庁文化財部記念物課文部科学技官（史跡部門）
浅野啓介

●2011年5月1日付け

研究支援推進部連携推進課アソシエイトフエロー
水野裕史

●2011年7月1日付け

文化遺産部主任研究員　青木達司

●2011年8月1日付け

研究支援推進部総務課施設係長　岩田真一
都城発掘調査部考古第三研究室研究員　川畑純
奈良教育大学施設課係長（企画担当）　志野愛由美

●2011年9月30日付け

退任　田辺征夫

●2011年10月1日付け

奈良文化財研究所長（兼）飛鳥資料館長　松村恵司

●2011年12月1日付け

埋蔵文化財センター保存修復科学研究室アソシエイトフエロー
赤田昌倫

●2012年1月31日付け

辞職　北山夏希

●2012年3月31日付け

定年退職　井上和人
辞職　大西肇
辞職　高橋透

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2011年度	2012年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	1,017,321 （特殊要因75,000含む）	894,472
施設整備費	0	20,352
自己収入（入場料等）	31,417	34,637
計	1,048,738	949,461

土地と建物

単位：㎡

	土　地	建 物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2012年4月5日現在）

単位：千円

研 究 種 目	2011年度				（参考）2012年度			
	科学研究費補助金		学術研究助成基金助成金		科学研究費補助金		学術研究助成基金助成金	
	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額
基盤研究（S）	1	23,010	−	−	1	31,200	−	−
基盤研究（A）	2	19,382	−	−	1	9,490	−	−
基盤研究（B）	3	13,780	−	−	4	12,870	1	1,690
基盤研究（C）	7	6,890	1	2,990	5	4,550	3	4,680
若手研究（A）	1	1,430	−	−	1	2,340	−	−
若手研究（B）	15	12,090	4	5,850	10	8,320	8	8,970
奨励研究	−	−	−	−	2	1,100	−	−

受託調査研究

単位：千円

区　分	2010年度		2011年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
研　究	24	187,996	26	189,208
発　掘	9	51,141	8	77,030
計	33	239,137	34	266,238

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2010年度		2011年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
	8	6,400	11	7,910

職員一覧

- 所長 松村恵司
  - 副所長 深澤芳樹
    - 研究支援推進部次長 上田浩司
      - 総務課長 石澤　剛
        - 課長補佐 大西俊隆
          - 総務係長 桑原隆佳
        - 課長補佐 重光一夫
          - 財務係長 江川　正
            - 主任 中野留美子
            - 係員 松岡広樹
          - 施設係長 岩田真一
            - 係員 （兼）三本松俊徳
      - 連携推進課長 田中康成
        - 課長補佐 村上加代子
          - 経営戦略係長
            - 主任 高田幸恵
            - 係員 石橋明奈
          - 広報企画係長 （兼）村上加代子
          - 文化財情報係長 渡　勝弥
        - 課長補佐（飛鳥・藤原地区担当） 車井俊也
          - 専門職員（飛鳥・藤原地区担当） 米野元則
      - 研究支援課長 紅林孝彰
        - 課長補佐 今西康益
          - 宮跡等活用支援係長
            - 係員 三本松俊徳
          - 再雇用職員 飯田信男
    - 企画調整部長 難波洋三
      - 企画調整室長 （兼）難波洋三
      - 文化財情報研究室長 （兼）森本　晋
      - 国際遺跡研究室長 森本　晋
        - 研究員 石村　智／（兼）田村朋美
        - 特別研究員（AF） 田代亜紀子
        - 研究補佐員 佐藤由似
      - 展示企画室長 加藤真二
        - 研究員 （育）西田紀子／丹羽崇史 （育）中川あや
        - 任期付研究員 成田　聖 森先奈々子
      - 写真室長 （兼）難波洋三
        - 主任 中村一郎
          - 技術職員 栗山雅夫
        - 再雇用職員 （藤）井上直夫
        - 特別研究員（AF） 渡邉淳子
        - 技能補佐員 鎌倉　綾
    - 文化遺産部長 小野健吉
      - 歴史研究室長 吉川　聡
      - 建造物研究室長 林　良彦
        - 研究員 大林　潤
      - 景観研究室長 清水重敦
        - 研究員 惠谷浩子
        - 特別研究員（AF） 松本将一郎
      - 遺跡整備研究室長 平澤　毅
      - 主任研究員 青木達司
    - （兼）都城発掘調査部長 深澤芳樹（担：平城）
      - 都城発掘調査部副部長 杉山　洋（担：藤原）
      - 考古第一研究室長 （平）小池伸彦
        - 研究員 （平）諫早直人／芝　康次郎 （藤）廣瀬　覚／庄田慎矢
        - 特別研究員 （藤）木村理恵
      - 考古第二研究室長 （藤）玉田芳英
        - 研究員 （平）青木　敬／小田裕樹 （藤）若杉智宏
        - 特別研究員（AF） （藤）荒田敬介
      - 考古第三研究室長 （藤）清野孝之
        - 研究員 （平）石田由紀子／川畑　純 （藤）森先一貴
        - 特別研究員（AF） （平）中川二美 （藤）橋本美佳
      - 史料研究室長 （平）渡辺晃宏
        - 研究員 （平）山本祥隆 （藤）桑田訓也
        - 特別研究員 （平）井上　幸
      - 遺構研究室長 （平）箱崎和久
        - 研究員 （平）鈴木智大／海野　聡 （藤）番　光／高橋知奈津
        - 特別研究員（AF） （平）井上麻香 （平）松下迪生 （平）中島咲紀
      - 主任研究員 （平）渡辺丈彦／馬場　基／神野　恵 （藤）降幡順子／石橋茂登／山本　崇／黒坂貴裕／今井晃樹／森川　実
      - 専門職員 （藤）（兼）米野元則
    - 埋蔵文化財センター長 松井　章
      - 保存修復科学研究室長 髙妻洋成
        - 研究員 脇谷草一郎／（兼）降幡順子 田村朋美
        - 特別研究員 辻本與志一
        - 特別研究員（AF） 赤田昌倫
      - 環境考古学研究室長 （兼）松井　章
        - 研究員 山﨑　健
      - 年代学研究室長 大河内隆之
        - 研究員 （兼）芝　康次郎
        - 特別研究員（AF） 児島大輔
      - 遺跡・調査技術研究室長 小澤　毅
      - 主任研究員 金田明大
    - 飛鳥資料館長 （兼）松村恵司
      - 学芸室長 （兼）加藤真二
        - 研究員 （兼）（育）西田紀子／（兼）丹羽崇史
        - 任期付研究員 （兼）成田　聖
      - 庶務担当室長 （命）車井俊也

※（平）：平城地区
（藤）：飛鳥・藤原地区
（担）：地区担当
（育）：育児休業中
（兼）：兼務
（AF）：アソシエイトフェロー

2012年4月1日現在